

短歌・俳句作品集

阿部キミ子

長い闘病療養の末に母が逝去し、母の荷の片付けの中に母が書き留めていた短歌、俳句のノートなどを見つけた。せめてもの母への恩返しかなと思ひ、PCに打ち込んだ。

幸泰 1997.4.20. 記

(亡き姉を悼んで)

みちびきの 火は消えて嘆き幾人

四人の子等 伯母を憶うて暮れの雨

云い残す こともありなん病院の窓

在りし日に 話したことの耳近く

姉逝きて 早一月は過ぎにけり

五條に向う心無上にさむし

「左味久」を ひき廻したる姉の業

逝きて忽(たちま)ちみだれ感じる

しっかりと せねばならぬと思いつゝ

又亡き姉をよびつゞける

この足袋も 吾(わ)を思いて賜わりし

あたたかき姉今は居まさず

おば上の 愛につゞまれこの日まで

おとなとなりし娘二人は

この着物 この羽織をとたのしみに
揃えて給えるおば今いづこ

玄関に お越しなさいと姉上の
姿今なき今日のおとづれ

七月 十七日（孫誕生）

金沢の 夏の日のぼる朝まだき
うぶ声高き病院の窓

生れ出て まだひと十日立たぬのに
無心に笑う初孫の顔

ごくごくくと 新しき乳のみひして
深い眠りのみどり子の顔

次々と 干されて並ぶみどり児の
肌着の上にとんぼとまりて

初孫の 顔に見入りて夏の夜も
しばしの時のごとく思えて

神の子と 思いきめても顔色の
黄ばみの長きに心痛みぬ

みどり児の 部屋につるしたオルゴール
賜り給いし愛を奏でて

新しい 父と母との眼差しが
肥立ち行く児にいくい入りて合う

やんわりと 握りしめたるパパの手に
抱かれて寝るまどらかき顔

父親の 愛のカメラの写し画は
神の子なればどれも可愛く

今日はや 目も見えしかと母親の
廻すおもちゃに眼差し向けぬ

みどり児の 寝るその暇に賜わりし
ベビブツクに筆を初めいる

すこやかに そしてかしく育つ様
守り給えと祈りに祈る

秋立ちて 縁先の木にひぐらしの
初音を聞きて初孫の寝る

次々と 竿に干される神の子の
はだ着の上にとんぼとまりて

初孫を 抱くかいなにずっとしりと
重さ加わるそのうれしさよ

新しき 母そのままの抱き方
なれぬかいなにその様子見ゆ

夏の日を 身に浴びながらパパの手に
ずっと抱かれて初長歩き

十月二十八日

初孫を 祖母に代わりて毎日を
見守り給うその有難さ

親の許 遠く離れて北陸に
人の情けに逢う娘の幸を

あたたかき 御手に包まれ湯あみする
智子の姿今日も浮べて

金沢の 雪の便りか気になりて
春の光がいやに待たれる

ひろびろと くりひろげたる雪の山
一夜あくれどその山高し

昭和三十八年
一月 元旦

背丈のび 子等それぞれ遊びあり
二人連れにて初詣
亡き姉の かたみと連れし愛犬も
日毎に育ち面影しのぶ

ずっしりと 春を運んだ年賀状

伸びて行く 娘(こ)と息(こ)の幸を祈りつゝ
明け行く町の初詣かな

めずらしく 屋根に残った初雪は
いやが上にもめでたさを添え

着飾った 吾が娘の姿しみじみと
見入りて願う夫なる人を

来る春は 吾が娘もどこか嫁しづきて
その幸祈る初詣かな

今年こそ よろこび事の重なりを
心に強く祈る初春

明るさの 満ち溢れたる言葉のみ
語り合うとちぎる初春

知り人の おくり給える年賀状
繰り返し見て夜とづくに更け

金沢の めでたく明けた元旦は
智子をあやすひねもすと憶う

忙しく つとめにはげむ吾が娘より
初便りきて読む春うれし

(同教え子の窓会に招かれて)

教え児に やさしく便りいたゞきて
子供のごとくうれし初春

教え児に 出逢ううれしさおもおえて
とくに目覚める初夢のあさ

二十年(ふたとせ)の 山坂越えた教え児に
尚幸あれと祈る初春

教え児に 守られおくる初春に
生きるよろこびひとしおうれし

お世話する 人々たちのありてこそ
そのひとときの有難きかな

教え児に 感謝をうけるその会に
恩師のみにあまえてぞみる

あけてくれて 只一つなる祈りあり
年の過ぎ行く吾が娘思ひて

吾が子には いつになつてか縁談の
成り立つ時に出あうものかと

縁談の 成り立つ時の早かれと
昨日も祈り今日も祈りて

目覚めては 吾が娘の幸を共にする
若人いづこと探してぞみる

亡き姉よ 愛し給いし娘の上に
背の君早く選び知らせ

この秋に よろこび事のあれかしと
祈りし日々も早過ぎにけり

結ばれる 縁を気長く待つべしと
あせる吾が身に鞭打ちてくれ

四月

(仙台、松島、日光、長野、金沢の旅)

仙台の 旅の立つ日港には
五色のテープ春風に舞う

学友の やさしい心集まりて
見送り給うそのまどらかさ

しだれたる さくらあちこち咲き始め
入学式待つ宿の朝々

誉れある 今日の入学ことほぎて
春の光りに光輝く

末っ子の 東北大に学ぶ今日
父母の心は春もたけなわ

高台の 見下ろす街のあい間には
杜の都のみどり木多し

仙台の 学びの庭にはげむ子の
日々を思いて案じてはみる

幸泰の 東北大の入学は

一族挙げての誉なりけり

下宿先 祈りに祈りし甲斐ありて

一 学生を差し向け給う

いづこにも 神のみ愛は満ち満ちて

下宿決まりぬそのすばらしさ

ご家族の 人たちがみながやさしくて

仲間入りする吾子ぞ幸あれ

帝大へ 入学できたよろこびは

今日の日までの最高の栄

入場を 待つ親たちの人垣は

二重、三重に輪はのびていく

寒い風 人垣の中くぐり行く

今日の入学記念せよとて

波しずか 幾多の汽船うかび舞ひ
松島巡りひらけいく海

島巡り 船は出ていく松島音頭
波きる彼方海苔採り船

松島の 湾に散りばる島々は
奇しき形の島ばかりなり

長き年 波にあらわれ島形
種々さまざまの名こそつけらる

かきぞつく 網は波間にゆらぎつゝ
春の日うける松島の湾

はるかなる 海の彼方に打ちつゞく
かきの養殖その棚の列

海苔つきて 青く彼方に見える竹
その間を巡るかきとり船

久しきを 波にあらわれ小島形
種々様々この名こそつけられ

西東 別れていても波間にて
心かわらぬ夫婦岩見ゆ

春深し 駅の柱は紅白に
造花の間にきわ立ちて見ゆ

臥龍梅 幹はうつろのごとくして
枝幾本に分かれ花咲く

臥龍梅 白と紅とが並び生え
またと他になき姿ぞ不思議

切株に わらべ三人たむろして
日光路行く汽車を見送る

日光で 何は美わしひいでたる
眺めこそあり中禅寺湖

何の木か 並び生い立つ日光路
この土地なればりんご並木か

古代には 馬を返したこの土地も
今はバス道ケールブルの道

男体山 行く春の日に雪残り
いろは坂行く客を迎えて

ものすごき 山の崩れを右に見て
見下す下にいろは坂見ゆ

玄武岩 その山はだの合間より
名だたる滝の幾すじか落つ

雪とけて 尚残る雪氷りつき
茶の山肌に縞を織り出す

待ちかねし 華厳の滝も水枯れて
ひろい白布の壮観はなし

中禅寺 まわる建物そのすみに
雪かくして冬はしのばる

みずうみを 囲む山々近く遠く
白根の山は銀色に見ゆ

名工の のみをふるいしそのあとの
永遠に残るか陽明の門

たるきにも あおいの紋のさんぜんと
徳川の世の栄を語る

ここかしこ ぼたんにから獅子眠りねこ
名工のわざそのすばらしさ

日光を ひと廻りしたその後は
旅の疲れに帰えり路につく

新しき 畳のふちは錦織り
絹の流れに美しき部屋

幸泰の 入学こそは父母の
ありがたき旅ここもかしこも

窓向え 六階の宿川へだて
一夜をあかす幸なる人々

窓の下 きりたつ岩の間をば
鬼怒の清流音高くして

鬼怒川の 岸のいで湯に灯はともり
見渡すかぎり窓はつゞけり

ふと目覚め 雨の音かとまかえたり
鬼怒の一夜の宿も忘れて

二人にて この美わしき鬼怒川の
温泉の宿有難きかな

温泉の 水は澄みたり朝風呂に
ひたる窓辺につばめ飛び交う

ふわふわと 体とけこむマツトレス
絹のふとんも我を賞でつゝ

(旅の途中東京で友と再会して)

いつまでも 香りの失せぬ友情を
今日も感じて涙する春

幼き日 便り交わせし友垣と
話し交わしつ人ごみを縫う

友垣と 旅の宿のよもすから
初孫のことに心通じて

乗り換えにとまどる今日の東北路
友のおかげで安らげき旅

背の低き 桑の畑があちこちに
車窓を過ぎてその土地を知る

アンテナの 高さも揃い美しく
春の日あびて長野路はるか

前面の 土手の木かげに白布を
ちぎりたるごと雪とけずして

春半ば 尚はんてんを着たる子の
雪の山並日本アルプス

(旅の終わりに孫を訪ね)

花と花 さくらの花のトンネルを
孫をあやして夫とふたりして

誕生し 九ヶ月をば過ぎたれば
かわいい手もて藝をする孫

小さき手 前に合わせて頂戴し
につこり笑うそのいとおしさ

こちらから 言うことのみは聞きわける
そのかしこさに父はほこれり

いつまでも　ながめあきぬ初孫の
つぎつぎとする藝のかわいさ

七月

(初孫、誕生日を迎えて)

誕生を　前にすすくすく育つ孫

このゆかた着せ抱いてみたきを

この浴衣　着せてさんじやく結ぶ娘の
今日このごろの幸のうれしさ

初孫に　初めて着せるゆかた着を
昔思うて針を運びぬ

二十日(孫が来て)

久しぶり　七夕の笹飾り立て
孫のよろこぶ夏の宵かな

大浜の　夏の海辺も久しぶり
孫のおかげでひねもすおくる

砂すくい　すくい上げては得意顔
よろこぶ笑顔みるぞ嬉しき

松の皮 ポンとへいでは声立てて
よろこぶ様に時を忘れて

馬か牛 ポンとへいでは声立てて
手に持ちながら又もせがみて

波よせる 海辺に深く腰下ろし
無心に遊ぶ初孫の顔

八月三十日（南淡町国民宿舎を訪ねて）

車行く 向うが丘にモダンなる
休暇村なる建物の見ゆ

萩開き 下る坂道ほど近く
鳴門の海に獲物つる船

父と娘と 三人連れて秋の日に
遠くから見る鳴門渦潮

九月

九日

便りある その度毎に初孫の
ちえつける跡閉じてみる秋

十一月二十六日

背広着る 吾が息と友に歩く道
冬光りがほのぼのと照る

十二月 二十日

ふたとせの 春秋経れど亡き姉の
姿はありあり悲し三回忌

昇天を ひと日ののちとも知らずして
姉のやすらぎみたる二十日夜

姉逝きて 守り給うやこのごろの
思ふことこそ暗示あるごと

昭和三十九年

一月 元旦

変わりなく 相み互いに仕合せと
繰返しつゝ送りたき日々

豪華なる この活け花も娘の手にて
その折々の節を知らさる

定年を 過ぎたりといえ
この若き尚一仕事前進にぞ見ゆ

父母よりも 背丈のびたる長男と
並ぶ姿ぞたのもしきかな

あたたかき 心づかいの家計簿を
贈り給いし元旦の夜

一年の 記事を手にするその度に
贈り給いし愛をしのびて

三日（住吉まいり）

久しぶり 背丈のびたる長男と
共に初詣吾が年憶う

道々に 絶えずやさしき心もて
手をひくごとく母をかばいき

来る春は 吾が娘もどこか嫁しづきて
その幸祈る初詣でかな

伸びて行く 娘と息の幸を祈りつゝ
明け行く年の初詣かな

親よりも 背丈伸びたる長男と
並ぶ後姿のたのもしきかな

度々の 年の初めの便りには
意気高々のことのみ見えて

色あられ 久方ぶりに作つたら
孫のよろこぶ顔を浮べて

朝霞より 便りあるごとその度に
金沢よりは日ざしあたたか

如何にして 初笑い顔させたかと
その原因(わけ)を知りたく思う

順調に 吾が娘の縁(えにし) 進まぬは
母の毒かと思う春秋

二十五日

東北の 吾が子を思うこの冬は
短かかれよと祈る朝夕

島の朝 物干し竿にかゝる雪
杜の都の道はいかにと

季節風 障子を強く鳴らしし吹く
今年の冬も今はたけなわ

新聞の 天気図にのる気温表

杜の都は札幌につぐ

仙台の 気温はかるか島よりも

二、三度高しと知るうれしさよ

一月の 日々も平和に暮れたれど

尚縁談の進みまどろし

(初秋)

あけくれに 何を思わん只ひとつ

年のすぎ行く吾が娘思いて

吾が娘には いつになりてか縁談の

成り立つ時に出あうものをと

縁談の 成り立つ時の早かれと

昨日も祈り今日も祈りき

目覚めれば 吾が娘の幸を

共にする若人の婿探してぞみる

亡き姉よ 愛し給いし姪の上

背の君早く選び知らせを

結ばれる 縁を気長く待つべしと
友の言葉をかみしめてみる

十一月二十六日

突然に 訪ね給いし友垣と
まくら並べて語るうれしさ

十二月

六日（次女の縁談成立）

縁結ぶ 使者を持ちて友垣は
吾が家に春を授け給える

つぎ孫の 誕生ひかえつぎの娘の
話まとまりいやに晴れやか

初孫の まねるしぐさのかわゆくて
頭によさをしのぶうれしさ

人生で 今が幸よとしみじみと
味わいひたるこの年の瀬に

年の瀬の ふけて行く夜半に幾度も
孫の咳声耳ざとく聞く

朝まだき 目覚めめてのちは来る春の
よるこびごとに思いはかせる

つぎ孫の 安産祈りそのつぎは
春を迎える娘のしあわせと

良縁の 成立せりと知らせうけ
寒き師走に春風ぞふく

嫁ぎ行く 娘の所作見ては知らぬ間に
さびしく感じ注意してみる

朝は冷え 昼間のひざしは初春を
もうすぐそこと今日は思いき

夕食に ウインクしても初孫は
その由を知りかわいく答え

祖父と祖母 孫の命令聞き入れて
部屋でころんで体操をする

初孫を おぼこに結いてリボンさす
その間中追いかけていく

初孫の 黒い髪の毛ふくらませ
前より見えるリボンのゆれは

ばあちゃんの 姿見えねばせまき部屋
広きのごとくさがしてぞみる

昭和四十年

一月

この年の 初詣こそ歡びを
祈り伝えて晴れ晴れと

初春の 空に飛び交うとんびみて
唄を歌いつ孫の手をひき

初孫の 歸えりゆく日も近づけば
尚もかわゆく初春も過ぎ

二十日（孫誕生）

生れ出る 孫の安産祈りいる
姿にみ入り心あたたむ

あの人も 孫の安産祈りつゝ
帯を手に持ちきざはしを踏む

秋立ちて 風のさわりはすがすがし
されど日ざしに汗は流るゝ

埼玉の 初孫の顔思いつゝ
健康なりとよろこびを謝し

秋立つに なおあつき知る中山路
うけし帯をばかいなに抱きて

頭髮に 霜交りたる老夫婦(みよう)連れ
吾も同じといわれ帯うけ

初孫の 成長を謝し生れ出る
つぎの孫への安産祈る

八月も 半ばとなれば風の音
秋近しと知る中山の路

生ま出た 歡びの声四方(よも)にとび
洲本の空に朝日高々

陣痛の 進めば進む時にこそ
神の子どもの誕生近し

生みませる 痛みに堪える姿こそ
母とその子のきづななりけり

二時、三時 時計の音のきざみこそ
生まれ出る子の力なりけり

日が昇る 時を待ちつゝ神の子は
陣痛強く母に呼びかけ

生れ出し 男の子の名をば如何とせん
これが幸かと幾度もかき

つぎ孫の 安産祈りそのつぎは
春を迎える娘のしあわせを

つぎ孫は 日々にかわいく育ち来て
今日はみつめて笑い初めにき

初孫も 先へ先へと気がつきぬ
さとく生れたこの歡びは

丸々と 肥立ちもよくて「正道」は
ふた月目にて笑い初めにき

娘の支度 孫の相手に日は過ぎて
嫁ぎいく日も早々に来る

娘は嫁ぎ 孫は歸えりぬ卯月をば
思い出すさえ如何にさみしき

待ちわびし 吾が娘の春も近づきて
かずら合わさん水取りもすみ

水ぬるみ 風は冷えのこれども
吾が家はとづくに春ぞきにけり

歡びは 重なるものと知り人に
もてはやされしこの初春よ

三月 十六日

春近く 娘の嫁ぎゆく日も近づきぬ
わが息思いてペンを走らす

あれこれと 嫁ぐ支度をする姿
しげしげと見て何かさみしく

二十八日（次女の結婚式）

つぎつぎに 写し出される写真見て
かくも良き君興えられしを

つぎつぎと 積み出されゆく娘の荷物
幸先よくと思ひのみ馳せ

彼岸すみ 日ざしは春を告げおれど
荷積み人の肩はすくめり

日和のみ 気にかかりたる今日の日も
良縁語る快晴の朝

子供達 背丈ものびてむつまじく
娘の送別の宴も華やか

卯月をば 目の前に見る今日の日
風尚寒くテープ舞いに舞う

告げねども 娘の旅立ちを知る人の
テープ持つ手をおがみつゞけり

二十余年を 住みなれたり島なれど
いよいよ明日は背の君に嫁ぐ

荷出し済み わが家をあとに船出する
娘の心をば察してぞみる

送る人 送られる人皆ひとつ
まごころ運ぶテープのゆれは

五色なる テープのはしを切り持ちて
うつしえに張る手元さみしく

アルバムの まとめにはげむその頃は
朝の「たまゆら」楽しみに見る

結婚の 日を前にしてとのいせる
湯船にひたり過ぎし日憶う

よい息をば 輿え給えるその力
只神仏の加護によりたる

弟の カメラマンをが呼びきたり
出来上りゆく姿写して

人生の 今が花よと見入る人
別れもひそみ思いこもごも

盛装の したいぼうしも形よく
これがわが娘と見つめてぞ見る

盛装の 娘の花嫁に見入りいて
はぐくみ来たる誇りを憶う

打かけの きつ甲の絵は輝いて
今日のよき日にけ高さを添え

式を終え 夫婦の契り結びきて
又近づきぬ春の君のそば

知り人に 手をひかれくる足元も
いと晴れやかに運ぶも嬉し

手元より はなせし娘には背の君が
身近かに座して愛し給える

よろこびは この部屋中に満ちみちて
若き二人の幸を希えり

披露宴 その席に座す母を呼び
心こもれる杯をさす

披露宴 居並ぶ人のかくも亦
善き人のみと見張りおる我

訪問着 きたる姿もかわいくて
娘の人生の華やかな春

小ざくらを ちりばめたり訪問着
春たけなわを物語る色

孫帰る 明日の事ごと気になりて
送り兼ねたる新婚の旅

何もかも お願い申し若人に
娘を頼りたり吉き日の母は

新婚の 旅の一夜も無事に明け
電線にのるほがらかな声

旅先の この母憶うペンの跡
幾度も読みて安堵深まる

幾重にも 娘頼むとあいさつの
声も嬉しく胸にこみあげ

つゞかなき 旅のプランを思いやり
宿の活け花何でありしと

四月

四日

嫁ぎたる 日々の住居を訪ねては
若人たちの幸を歡び

田園に 打囲まれて送る日々
初夏の日ざしは幸を奏でて

ほつとして 船室の窓をまくらする
さみしき母の吾を見出す

五月 二日

里帰える 息と娘を迎え今更に
よき春の君を間近かにぞみる

里帰える 若い二人の箸箱を
買いに出る足いとも軽やか

よい息をば 輿え給いしよろこびは
里帰えりにて又も深まる

若い声 入りまじりては知らぬ間に
春の宵すぎ午前二時打つ

アルバムを つぎつぎ出して春の夜の
雨の音さえ歡び奏で

待ちわびし 里帰える客にこやかに
今日の幸をば物語りけり

珍しき 春の台風おとづれて
欠航なれどそをよろこべり

六日

親として 息の行き先を知らぬこそ
母の不甲斐を無上なりけり

親の意と 合わぬ事より事々に
己が勝手に事を判じて

背又のび 務めの事となりてより
息の伴侶の事のみ思い

よき婿(むすこ) 身近かにふえた歡びを
みつめてみては己が息を

どこまでも 己が考えを押し通し
進む道にはつつがなきをと

十六日(琵琶湖、石山観光)

つつじさく 岸边の見える琵琶湖なる
水なみなみとうちたたえたり

瀬田の橋 ずすみ時なる捨て小舟
さつき乱れてうちたたえたり

古色なる 瀬田の橋なる欄干も

現代色にぎぼし塗りかえ

めずらしき 奇岩のはだも五月雨

黒々はえてさすが石山

幾筋の インターラインも過ぎ行きて

大津、石山、初夏の道

現代の 人智の粹を集めたる

琵琶湖大橋くの字に見えて

モダンなる 線も美わしその色も

琵琶湖の水にはえて明るし

茶どころの 宇治の里にもれんげ咲き

今たけなわの初夏のよそおい

二重、三重 かさなる里に色つゞじ

車中の客にほほえみて咲き

娘は嫁ぎ 息は学舎にとどまりて

気軽い父母は琵琶湖路の旅

昭和四十一年

五月二十四日（孫誕生）

待ち兼ねし 産声聞いて父と祖母
分娩室にかけこみにけり

予定日を はるかに過ぎしみどり児の
生まれ出でたるこのたくましさ

病室の ベッドの中もせまくして
まわりの人にほめられし日々

生れ出て この二日目の夜よく泣きて
安じされたり新しき母を

いとこ達 退院の朝出迎えて
チヨットさわりぬみどり子のほほを

湯あびする みどり児囲みにぎやかに
初夏の夕べの時はすぎ行く

ずっとしりと いたく重みにすこやかな
孫授かりし幸をおがみぬ

はらづつみ とても大きくはり出して
そばにいる人に丈夫さを見せ

湯上がりて 気持ちよき氣に足のぼし
湯入れし人をしげしげと見る

新しき 母の編みたるいち松の
毛布の上にさとときかんばせ

三人目の 孫のかんばせしげしげと
見入る祖母ははて何思う

十月二十二日（長男の結婚式）

新春の 早々にして福音を
持ち込み給う君ぞ尊し

娘は嫁ぎ すばらしき娘にめぐり合い
甘に語りし化石ある宿

育ぐくみし 息も適令の春迎え
神のみつかい目の前に見て

熨斗（のし）の鶴 羽ばたきひろく若人の
幸多かれと祈る氣に見ゆ

愛念の 満ちあふれたる品々は
幸多かれと話し合うごと

長男の 熨斗の受領書並べ見る
よろこびの春めぐり来たれり

育ぐくみし 二十余年の仕上げとて
積み重ねたるみ親の心

つぎつぎと 粧おい進むかたわらに
母のまなざし愛に燃えつゝ

菊香る 今日のよき日に世継ぎ息の
結婚の宴いとも華やか

にっこりと ほほえみ交わす友垣の
姿に見入り共に歡ぶ

机上には 花と料理の香はにおい
今日のかど出に歡びを添え

若人の 行先見守る人々の
記念写真も歡びの渦

かすし芸 只ひたすらに若人を
ことほぐ心にじみ出にきり

若人の 晴れ着の色もあざやかに
写し出されるうれし八ミリ

愛深き 人の拍手をうけながら
若人の手はケーキの上に

朗々と 読みつゞけらる祝電に
交り多き過ぎ越しの幸

華やかな 席にあふれる孫の顔
吾もいつしか三人の祖母

春の君と 並ぶ二人の娘見て
今日の歡び尚も高まる

若人に よびかけ給う教えこそ
人生航路のはげみこそなれ

人々の 祝辞にみちることばには
み親の心察し給えり

娘は嫁ぎ 神の娘を給わりて
縁の人をばいつくしみ見る

若人の 幸を祝える御愛語に
きき入る吾の心ぬれつゝ

お母ちゃん おばあちゃんよと周りから
呼掛けくれし今日のうれしさ

二十年余を いつくしみたる娘とは
永久に吾が息の伴侶者として

愛みてる まなざしうけて若人は
今日最上の幸を感じて

デッキにも 見送る人の顔と顔
華やかなりしいで立ちの日は

赤白と テープは浮びみだれ飛ぶ
船は幸へ新婚の旅

花嫁の 持てるテープのはしはしは
幸をことほぎ愛深き人

あいさつの 誓いに勝る人生を
歩みつゞけよ努力して

昭和四十二年

三月

(仙台、鳴子、水戸、伊豆の旅)

つつがなく 四とせは過ぎて学舎を
修^(お)えし記念にアルバムを編む
卒業の 式のあしたを息と共に
ひわもす巡る仙台の街

仙台の 学び庭に四とせ過ぎ
大型の証をうけるよろこび

数多き 学士を送る楽の音は
「蛍の光」意義深く奏で

はるばると 海山越えて集いたる
父母の姿は愛に輝き

集いたる 父母みな入場叶いたり
遠き旅路の労の甲斐あり

ひろびろと ひろがる庭のさくら花
散りしく下で文開きたり

新しき 増築の香こもりいる
部屋にめぐまれ論文を成す

なごやかな 下宿の日々は四とせもの
長き月日もいと短くて

ひろびろと 眼下に見ゆる仙台の
青葉の城は春尚遠し

彼岸すぎ 湯気数多くたちのぼり
困む山々白銀の峯

白銀の 峯打ちつゞく湯の町の
寒さ忘れるなめこそばかな

あたたかき 心にふれひねもすを
そぞろ歩きぬいで湯の町を

西多賀の 空にひろがる愛の手は
表情かたき子等にそそがれ

今日も亦 如何すればやと西多賀の
愛の園生に花や咲くらん

如何すれば この子の瞳輝くや
今日も考え接してぞみる

屋外に 日光浴をする子等の
姿みつつけて看とる人々

昨日より 今日ほゝえみ増したりと
喜び交わす指導の天使

退院の あしたはきつと来るなりと
日々の指導をすなおにぞうけ

車椅子 のりて外出できる身の
幸を染みじみ味つてぞみる

ととのえる 松の根元にたむろして
烈公しのぶ水戸の梅林

夫と共に 石だたみしく滝道を
より添い下る春浅き伊豆

青々と しげれる芭蕉の葉かげには
バナナ三重四重盛り上り見え

国のため 古代にそしりをうけし人
今日は日毎に観客詣で

四月

(横浜の旅)

マリン塔 連れ立つ孫の手を引きて
高くのぼればさすが横浜

片言で 「これなあに」と聞く孫に
同じ名詞を幾度も答え

ビルの屋根 入りまじり立つ横浜は
桃さくら花今盛りなり

入園を 最近に迎える初孫は
漢字まじりの文をよく読み

食事より つぎつぎ話す初孫の
思考の過程きき分け嬉し

ばらの絵の 印刷されし包装紙
小さき手にて美しく切り

初孫の 話す内容さとけれど
食事と着衣のとても遅きを

四才の 孫の手にするカルタから
おとぎ話のことは朗々

入園の 式の庭には鳩三羽
さくら吹雪をえさにして食む

十一月四、五日（秋芳洞、秋吉台、広島、湯田温泉の旅）

教え児と 肩すれ合いつ名橋を
渡る師弟の胸なつかしき

記念館 並べる品のひとつにも
ピカドン魔力如何にひどきを

潮干して 足場の石をふみながら
鳥居に近き彼岸へわたる

特別の ぞうりをはきて回廊を
渡る軒場に海草の群

潮満ちて 回廊のもと潮騒の
音に一人の名鳥居かな

行くところ 豆電球のつながりは
観光バスにドライブインは呼ぶ

五重の塔 上ほど小さく見ゆれども
五つの屋根の大きさ等し

ドライブインに 立ち寄る毎に思い出し
棚の土産はつぎつぎにふえ

事故多し 今日このごろの旅なれど
無事にすませし幸せな人々

十七日（高尾、嵐山観光）

紅葉狩り きざけし下る人の群
もみじ見づして足元をみる

紅色と 黄色のかえで幾重にも
つり橋の上のどき枝見ゆ

もみじする 木の根元にてたたづめば
河原で遊ぶ人の声する

ゆさゆさと むりゆすりする若人は
もみじを外につりばしを持つ

散しきる 高尾のもみじよりわけて
新たにちりしひと葉手にする

広々と 河原の中に屋台出て
すき焼の上にもみじ葉の散る

昭和四十三年

四月 二日（夫と二人で福良国民宿舎に遊びて）

丘の上 独り立ちする子等の上に
思いをはせる春の一日

歩みつゝ 子育て終えし今日の日を
あたえ給えるみ恵みに謝す

夫と共に 春のひと日をうずしおの
見える丘にてむすびほうばる

二十一、二十二日（姫路でのクラス会）

還暦を 迎えし春のクラス会
集う友垣今日をよころぶ

八月十六、十九日（黒四、善光寺、万座、浅間観光）

扇沢 洗面の水手にうけて
あゝ冷たさやつめたさや

黒四の 山高くして時雨あり
残る暑さも果てする

黒四の 朝の食事にわらびつき
下界の夏も山では春が

ダムの水 放水の口ほとばしる
その様けむり気体にぞ見ゆ

待かねし 黒四の景雨しきり
ダムの周りも眺めたるもの

旅に出て 用意されたる食膳に
向う度ごと幸を感謝す

善男と 善女の群れにぎやかに
流石名高き善光寺かな

うす暗き 拝殿の奥進みゆく
まっくらな道とても不安なり

車内より 進み行く道仰ぎみて
よくもけわしき道を拓きしと

大ゆれの 車は進む上州路
硫黄の香り万座は近し

山又山 その谷間よりわき出でる
きり白くして眺め壮観

上州の スカイラインの道々は
萩咲きみだれ秋早深し

白樺の 林につゞくから松の
枝ぶりもよくみどり美し

連山の 重なる色はみどりより
空につゞきて壮観の極

明けていく 万座の宿の窓辺には
温泉の屋根下につゞけり

年寄りの 日を迎えたる六十の秋
夫とせずかな日々をおくりぬ

鬼押しの 奇岩奇勝の有様は
浅間噴火とは思ひも出来ず

待かねし 昼食の器はこけしにて
食べ終りたるあとはおみやげ

高山の花それぞれに手折りしも
おきての声におどろき捨てぬ

昭和四十四年

五月二十三日（次男の結婚式）

便り毎 幹事の方の友情に
島のみやげをさがしてぞみる

末っ子の 華燭の典をあげる頃
島での親は早六十路越え

あれこれと 揃えみればその姿
おのぼりさんと自称してみる

末っ子の 結びも成りて初夏の日に
みちのく行く吾は嬉しき

六十路越え 四度の結び味わいの
親のつとめ終えし今日の日に

長男と 夫と連れ立つ仙台路
末っ子思い幸は最高

就職し 三年のつとめ無事終えて
結びもなりてスタートを切る

みちのくの 結婚式を前にして
孫達迎えにぎやかな宵

居並べる 愛みてる人み渡して
幸多き息をしみじみと見る

七とせを 杜の都にはぐくまれ
今日は嬉しき結婚の日よ

三々の 九度の盃手にする子
ホット思へどこかさみしく

三々の 九度の盃うける弟に
姉と兄との瞳あつまる

盃うける 吾手も末っ子の
結びの祝いとしみじみ思う

愛高き 幹事の方が編み出せる
スライド見れば涙流れて

友人の 心こもれるおくり物
添えられし文よるこびて読み

御二人方 結びの神となり給い
いよよ恩あり愛深き人に

母様と より添う嫁をいただきて
むすこ頼むと話し合う初夏

初夏の 晴れてことほぐ集いかな

出発の 時をもしらさぬ若人も
聞き出してさえ見送り給う

島さして 帰れる祖父母を送る孫
バイバイと書く特急の窓

バイバイと 手をふりすぐに横を向く
その様ずつとおとなびた孫

島の初夏 つどへる人の歓びをうけ
息の結婚の実感深し

つぎつぎと 歓びつきぬ雰囲気に
二人は無上の幸を感じて

十月
ヘルストン かけて戸外に出てみれば
仰ぐ秋空中秋の月

夕食すみ 跡片付けもしてくれる
互いにいたわる今日このごろ

十一月

(静岡の旅)

温泉の 宿の夜明けにペン持ちて
友を思いつ便り書く吾

かに料理 富士の裾野の寒さをば
忘れさせられ舌つづみうち

富士山の 上に重なるかさ雲は
旅する人をよるこばしくれ

あれこれと みやげはふえてつり棚は
ぎっしりつみて留守人思う

昭和四十五年

三月十八～三十日（横浜の旅）

動く度 おばあちゃんと手にすがり
初孫かわいく長居いた春

どうぞと あいさつすます初孫の
代表の姿目にしめうれし

七月二十三～二十七日（北海道の旅）

こどもらの 上に気ががることもなく
初夏の日うけて北海の旅

飛行機の 発着知らず電光板
待合室の前にかがやき

細い道 しばらくゆきて知らぬ間に
前に開ける機内かな

六列の 座席は並ぶセブンツ―
ベルトを占めていよいよ飛行

かすみすぎ 白雲を見てその上は
青空ひろくひろがりて見ゆ

白雲は ぐんぐんわきて青空の
こなたかなたに消えさりてゆく

ぐんぐんと 上昇したり五千四メートル
目前に美しき見ゆ夏の厚雲

左下 左翼の上に視線おり
その右側に生ける雲海

急に湧く 入道雲のいただきは
窓辺近くを盛り上り過ぎ

温タオル つぎの冷菓は欧風もの
機内でやさしくサービスをうけ

きみどりの ジューズをのみて眺めれば
雲界はるか富士も見え

歌にいう 頭を雲の上に出し
日本一の富士も見え

東京の 羽田の空をせん回す
山、家、道の小さくぞ見ゆ

朝まだき 宿を立ち出で歩む道
露にぬれたり名も知らぬ草

白い花 つけるえん麦まじり生え
黄色き色あり月見草

濃く青く 山影写し色万変
名もふさわしきなぞの摩周湖

たてかんば 並木を右にバスは行く
雲低くたれ川湯は近し

おだやかな この網走の海岸も
冬ともなれば氷山のうく

砂ほれば わき出る湖のあつくして
屈斜路湖畔夏のまさかり

流氷の 北に去る時網走は
春のおとずれもたらすという

網走の 原生園にのぼりきて
ぼたん色なすはまなすを見る

北の海 バスの窓よりはいる風
自然クーラーのすがすがしさよ

展望台 ひろびろ見える大平原
これがこの地の土の特色

一日の 開花が命寒き国
はなびら散りてかおる玉の実

磯の香は バスの中にもはいりくる
オホーツクの海網走の町

ひろびろと 広がる平原その中に
トタン屋根のみ赤、青、みどり

氷山の 押し寄せてくるオホーツクの海
夏の海辺にその名残見づ

パンクして つくろいくれる人々を
ねえさんかぶりで感謝しつつ見る

パンクした 峠の道のかたわらの
大踏とりて日傘としたり

両岸は 層なす岩々斜めにて
水はこどれり石狩の川

断崖の 岩間におちる水白く
美しき名の流量の滝

断崖の 長きつゞきにみどり生え
石狩川とうつる層雲峡

右の森 火まつりの火とおどり見え
右の森には大火花立つ

たいこの音 強弱つけて鳴る度に
調子あわせる火まつりのかげ

道ばたに 直売の店さくらんぼ
その味ほめるバスガイド

羊蹄山 真夏をものせんと
集うハイカー数限りなし

二重なる 峯の向うにえぞ富士は
たなびく雲に美観をば添

小山なる 岸はつゞける洞爺湖は
湖中に二、三の島いだき

緑なす 山の間につき出せる
茶褐色なる昭和新山

太古には 麦畑なるその土地に
噴煙上がり新山となる

羽田にて あつさにうだる待合室
肩たゝき寄る横浜の子等

羽田をば とび立ちてすぐくばられし
甘味の紅茶、欧風の菓子

機内にて 温き湯茶いただけば
いよいよ気体は上昇を

雪おとし 容易ならぬトタン屋根
みどりや赤ときわ立ちて見え

山見えず 開けりわたる大平原
日高付近は視線も遠し

(数え歌)

- 一つとや 人もうらやむこの旅行
この旅行
- 雲の上飛ぶたのしさや たのしさや
- 二つとや 二人連れにてこの旅行
この旅行
- そろばん道も何のその 何のその
- 三つとや みんなたのしくこの旅行
この旅行
- 十勝川なる湯の宿に 湯の宿に
- 四つとや よろこびあふれる人たちと
人たちと
- アイヌ部落で熊がりを 熊がりを
- 五つとや いつもにこにこしていると
している
- つぎの旅まで楽しめる 楽しめる
- 六つとや 昔ながらのからまつの
からまつの
- 林を右に左にと 左にと
- 七つとや 七色変わる摩周湖の
摩周湖の
- 神秘の水はひろびろと ひろびろと

八つとや やつでのごとき大ふきを

大ふきを

かさにさしては写真まで 写真まで

九つとや こんなたのしい旅はない

旅はない

なんといても楽しい旅はない

旅はない

十とや 共に健康気をつけて 気をつけ
又の旅によろしくね よろしくね

八月

三日～十二日（仙台、中尊寺、蔵王の旅）

大木の 木立ちの間より衣川

北上川も昔語りを

見下せる 谷間は風で古木のみ
その向うにはみちのくの路

中尊寺 せみの声ききとろろそば

雅美豊なる器に盛りて

清衛の 昔を語る油ぜみ
木かげすずしく秋しのびよる

大木の 木立ちの間より衣川
見下す向うは東北街道

杉木立 油ぜみなく参道は
ブルマ姿の若人多し

旅をして 一番高きとろろそば
空と空気は全くの秋

くつきりと ほり明けられし火口湖の
うすみどりなる荘厳な水

お釜をば つつむ岩壁ながめつゝ
丸きむすびに舌つづみうち

木の生えぬ 神の摂理の開けたる
お釜のまわり地層あざやか

みどりなす のぼりみちには幾重にも
白いガードのきれぎれに見ゆ

ガスこもる 神の摂理の開けたる
山の王者の蔵王かな

溶岩の 赤き石ころつみつみし
旅情しのばるさいの河原は

さいの川 さいの河原と名づけられ
旅する人をしばしあの世へ

七夕の 五色のテープくぐりつつ
みちのくの日々おくる子等思う

「もみの木」の 文字ちなみたる七夕は
時のブームを人によびかけ

七夕の 細く切つたるひもの波
とび交われる美のまつりかな

色テープ 大きくゆれるその下を
くぐりふり向く観光の客

ねむる孫 むりに起こして七夕の
赤きテープのそばによりけり

七夕の 美の大波はゆれうごき
うなこをひらく全国の客

七夕の 祭りも過ぎし仙台の
朝はすっ かり肌寒きかな

幸浩と 呼べば必ずにつこりと
うけ答えする三つき目の日々

ひとりでに ひっくり返る幸浩の
すばらしきかな成長ぶりは

二組の 祖父母の前で食べ初め
膳の上には西瓜の季節

赤き膳 食べ初めの品並べ
祖父母のあるを如何に幸かと

枡の上 かまえて座わる幸浩を
愛深き人喜びて見る

幸浩は めで鯛うけて仕合わせを
祈る祖父母にほゝえみかける

みちのくの 小さなすの漬物に
舌つゞみうつつ関西の人

みごとなる つかりかげんの長なすの
よき色かな舌つゞみうつ

仙台の 夏雲通う空を見て
おむつ干す祖母とても嬉しく

だっこして 耳に気をつけ湯浴びさす
そばで手伝ういとさときママ

ぐんぐんと 飲みほすミルク見る
祖母のまなこは孫のかんばせにのみ

南国の 淡路の島は盛夏なり
この涼しさはみちのくの味

愛情の こもれる三度の食膳に
いと高く盛るみちのくの味

みちのくの 夏を訪ねて十日間
短くすぎし孫を見た日々

みちのくで 息は選(よ)りし嫁さとしくくて
日々の動きを見る母嬉し

みちのくと 南の島のへだたりも
打ちとけてこそ近くなつかし

あたたかき 人にかこまれ送る息の
仕合わせ思い心安んじ

別れして 駅に来たれどさとき嫁(こ)は
送らんものと駅せ参じ来る

昭和四十六年

二月 十四日(夫、脳軟化症を発病)

病める妻 無理云う度に有難し
この無理なくばいかに悲しき

ごてんまり つめたる箱のこわれをば
千代紙張りてつくるいの春

立ち上がり 重き椅子をば持ち運ぶ
夫の姿褒めたたえたり

梅さきて 桃の蕾もつきたれど
娘の許の世話尚も長びく

みちのくの 空より来たるごてんまり
病みたる父は涙ぐみみる

おやつには さやピーナツを許されて
こたつ囲みて試食してみる

目覚めては 吾家のことに思いはせ
帰れる時の夫安かれ

父憶い 針を運びし甚平を
先に羽織てこす早春賦

九月 十五日

孫つれて のぼる山道日ぐらしの
声しきりなり敬老の日

二十三日

彼岸花 あちこち咲ける山道を
孫つれまいる墓参かな

二十五日（大阪無量寺で名灸をうけて）

一生を 働きつめた人々の
並ぶ背中に名灸をうけて

秋の日に 名灸の里訪ね来て
吾身いとしむ人々を見る

名灸の 煙たちこむ部屋の中
働きつめし人も多きを

名灸を うけて歸りの船の窓
空すみ渡る代表の秋

十二月

鬪病の 十月をすごし秋の日に
二人連れ立ち船旅に出る

昭和四十七年

六月 十四日（長良の旅）

梅雨晴れに 長良の旅のお供する
この嬉しさも息子ある故

突き出たる 奇岩のわれ目に岩つつじ
ライン下りに興を添え

瀬を下る 岩根にあまた渦をまき
船底きしりスリル満点

船先を 五つ六つと突き出して
並べて待ちる鵜飼船かな

鵜飼待つ 長良の川の川の面に
三ヶ月淡く影を落せり

鵜飼待つ 折り箱の弁当は
色美しく山海の味

おどり子を 乗せた長良の屋台船
鵜飼待つ客とくよろこばせ

紺碧の 空の青さに低き山
旅する客にほほえみかけて

温き 招きをうけて梅雨晴れに
長良をさして行く仕合わせよ

鵜飼待つ 屋台船には福引の
笑いの声は川面にひびく

十二月 十二日（孫誕生）

陣痛の 数も少なに孤々の声
師走の空にとび出たさけび

いかほどに 多忙な日々であつたれど
孫の誕生に力づけられ

孤々の声 聞きて渡りしいろがねの
橋の上吹く師走の寒波

三、四役 ひきうけおくる朝夕に
くしけずる日もあくる日となり

孫の数 ふえさせ給える元旦は
吾が世の春と幾度もおもゆ

寒き日に 産ぶ声あげし孫なれど
あたたかき日にお宮参りを

打揃い 宮まいりするこの姿
神のみ加護と重ね感謝す

健やかに 育ち給えと祈りつゝ
神主の声有難く聞き

立ち並ぶ 背丈伸びたる孫達も
いとすこやかに今日を迎えて

玉串を 捧げるまではねむりいて
たいこの音に目をさましたり

せわしさに 衣がえせず孫だきて
見入りし我も六十路なかばを

よく肥えし 九人目の孫しつかりと
抱きて立ちたる老松の前

五つ月 またたくうちに過ぎし今日
飾りかぶとの前にすまして

よく肥えて ほほえむ顔に夏の日
まぶしと見えて目をほそみたり

初節句 飾り人形にあやかりにて
かわゆく元気に育ち給えよ

自動車の 形と音に目をつけて
声出し初めり初夏のまひるに

かこまれし まきを取り去りひろびろと
墓石は光る春の彼岸に

昭和四十八年

孔雀蘭 紅つよく花さかせ
よるこばしたりこの初夏に

昭和四十九年

(五十七年ぶりにクラス会をして)

師の君の 姿窓辺に見えるとき
ふり返りつゝ家路をさして

人生の 幾山河を無事越えて
出会える今日は早六十路越え

今はなき 校舎の跡を通る度
遊び学びし友は如何にと

八月

(夫と散歩して)

お互いに 心なごみて送ろうと
語り合つたり散歩する道

有難し 二人連れ立ち散歩する
夏の日高くのぼり初めたり

道々に 浮かびえがけることごとを
三十一文字につづりみる我

ひと休み 擦るかたわらの雑草を
色とりまぜて持ち帰り活く

十一月 三日（小豆島観光）

絶好の 秋の日和にめぐまれて
二人連れ立ち四国路を行く

観光の 人足しげき高松港
幸ある人の群に交りて

連絡船 カメラ片手に一周し
つぎつぎ見ゆる島を写して

なめらかな 海面すべる連絡船
オリーブかおる島も間近に

幾重にも 折り重なてのぼりゆく
スカイラインの岩もみじかな

みごとなる 岩山の列ならべいて
ああ絶景と岩山をほめ

島多く 海静かなる瀬戸の海
あれは四国か淡路の島か

十一月 十七日(三千院 寂光院観光)

秋雨に のび重なるもみじ葉を
ふみて石段のぼり行く

十一月 十七日(三千院 寂光院観光)

秋雨に のび重なるもみじ葉を
ふみて石段のぼり行く

昭和五十年

四月

年毎に 花見をしつゝ憶うには
今年の春もよく無事なりと

(夫と友と、観劇のため大阪へ)

念願の 観劇叶い出かけたる
春も終わりの道頓堀に

水ごけに つゝまれたりし不動尊
日々に詣でる人の手桶で

ああ見事 みずみずしさに緑はえ
しばしたたずむ水かけ不動

願い事 叶え給えと水かけの
不動尊なり苔一面

ひらひらと 花びらうけて続く人
さすが名高き通りぬけかな

淀川の 堤につゞくさくら花
八重のはなびら枝もたわわに

満開の 八重のさくらを見上げれば
わずかに残る蕾うるわし

五月十一、十二日（椿温泉の旅）

久方に 一泊の宿南紀にて
連れ立つ旅のいかに嬉しき

煙にて くすぶりたるか黒い磯
さざなみよせる煙樹海岸

鉄筋の ホテルは左右に立ちならび
そこにそびえる椿温泉

窓越しに 名残を語る鯉のぼり
南紀の旅に風情あり

湯を浴びて 広場につどい山海の
膳に向いてくつろげる客

なめらかな いで湯にひたり眺むれば
岩山をうつさざなみ白し

波よする 岩間にあらわの地層見ゆ
ここが南紀の砂岩帯なり

きり立てる 三段壁の岩層に
ひび怒涛は魔のごとく見ゆ

台風時 聞きなれたりし日の岬
その地に立ちて展いながめを

貝細工 孫のみやげと売店に
立ちよりえらぶあばあちゃんたち

大岩を ほり下げたりし洞窟の
したたるしずくうけながら行く

背丈より 高く伸びたるサボテンを
仰ぎ見ながら歩く植物園

昭和五十一年

一月

皆元気 今年の祝いも無事迎え
只有難し、有難し

日常の 雑事もすべて忘れてたり
旅にしなくば味わえぬ味

播州路 次々すぎる町々に
住む友垣の上を思いて

山並の 下方に見えるそうめん滝
その名のごとく流れみじかく

波賀町の 中心という町中も
緑の中にまだらかな家

山迫る その間行く播州路
行く先々に若葉もえたつ

満々と みちてる水もダムのもと
その水辺には葉ざくら二本

砂丘すぎ 進む右手に開けたる
お伽話の白兔海岸

砂山は 低く高く連がりて
観光の客まだらに続く

砂山の はるか向うに見ゆる海
日本海よと旅に来てこそ

サラサラと いたもこまかき砂をみて
はるかに見ゆる海をめざして

宿りたる 窓辺の下は清流の
ひびきは高く寝つかれぬ夜

旅の友 明るき話題つぎつぎと
笑いは部屋にみちこぼれけり

大山の 有料道路は打つづき
赤松林すなおにのびて

山迫る すそ野に建てる構えには
今と昔の面影あらわ

大山の すそ野に繁るぶなの木の
所どころに白きふようも

大山は 高くそびえて残雪白く
訪ねる人の肩をすくませ

大山寺 参道近くおそざくら
あまたたずねる人をなくさめ

幾本の 添え植えのごと新芽もえ
ぶなの林のうるわしき色

肌寒く 厚着はしくて登り行く
大山寺へときざはつづく

大山の 有料道路は打ちつゞき
若葉の木立みどりもえたり

蒜山の ぶなの頂右に見て
進む道路に国定公園

昭和五十二年

五月十六、七日（天竜川下りの旅）

兄妹の 二組夫婦連れ立ちて
天竜下る旅を目ざして

五月晴れ 今年も二人連れ立ちて
天竜下りの旅に出る幸

旅に出る 兄のさみしさ胸にしみ
義姉を誘いて旅はにぎやか

東名の 高速道路も快く
昨夜の雨でみどりなおよし

五月晴れ 重着なれど丁度よく
天竜の旅なおこころよし

馬籠の 宿場を訪ね来て見れば
木曾路はすべて山の中、中

藤村の 名句の宿場馬ごめは
すべて山々開けて静か

低き山 前に開ける中津川
ここも昔の宿場なりとか

材木の 車は前をさえぎりて
さすが木曾路の中山道よ

山菜の 味もうまけり昼食の
皿に盛られる木曾路かな

藤村の 記念なる品かざれりと
聞けど登れぬ馬ごめの山

恵那山の 飾れる両側の
ラジューム燈もにごってみえる

恵那山の トンネルの中コンピューター
違反も入るラジオ放送

恵那山の 長きトンネル日本一
いと長かりき十分間

南なる 信州の里はみどりまし
りんごと桑の木道に添い見ゆ

南には 南アルプス遠く見え
北につらなる峯に残雪光る

車窓より はるかに見えるしろがねの
山又山は北のアルプス

ゆるやかな 水面もあれば波たてる
さざなみの音水しぶき立つ

重ねたる 竹の竿には美しき
長きつらはさすが駒ヶ根

雪の壁 下を流れる水の音
深い谷間に落ちる壮観

駒ヶ根に 日本一のロープウエー
前に展がる縞模様的美

木曾路こそ 山又山にかこまれて
さすが信濃と幾度も思う

サワサワと さざなみの音高くあり
しぶきをよける布をかかげて

大小の 丸石多く重なりて
天竜下る客の目をひき

そびえ立つ 屏風岩にみどりもえ
天竜下りに興を添えたり

散歩道 しびれし手をばもみながら
健康なりし昔なつかしむ

昭和五十三年

散歩後の 身体の調子伺えば
今日はどうれしく足かるやかと

八月 八日

七人の 孫揃いし盆休み
夕餉の膳にカメラ持つ祖父

孫七人 その父母合わせ十三人
見守る祖父母こよなく嬉し

十九日

短命の 油ぜみの声今日は絶え
草場にすだくこほろぎの声

二十一日

八月も ちようど半ばの朝まだき
初音ありたり箱の鈴虫

岸壁に 腰下せば汗ばみて
はだに冷く秋しのびよる

久しくも 患みたる妻の車椅子
おせる夫の苦勞ねぎらう

昨日まで こずえかしましせみの声
今朝は秋冷え一声もせず

船だまり 今日のしおどき思いつく
網をつゞれる骨高き手で

せみの声 かしましき朝孫つれて
話し合いつく散歩あと追う

電柱や こずえを越して見える空
日の出の前の如何にすばらし

地平線 半月円の太陽も
見る見るうちに色はかわれり

朝風の すがすがしさが身をかすめ
ふな端たたく足もとの波

どろめ船 岸に帰れば教え児は
えものつゞみてさし出してくれ

昨日より せみの鳴き声すぎましく
夏たけなわを知る散歩道

つれ立ちて 車道のそばの散歩道
逢う知り人を思い出しかね

川口の つゝみにつなぐ釣船に
朝まだきより網つゞる老人(ひと)

峯はるか 入道雲のつらなりて
今日のおつさをさきかけて知る

つりだまり 投げしうきわにうごきあり
打ち上げ見れば魚光りはね

(市議選を終えて)

決戦の 知らせをうけて憂うなり
島の行く手もいよよ暗き

敗戦を 身にしみうけて早秋の
一夜は長く寝苦しかりき

夕方の 冷夏の味も日に深く
国のみだれも神のしめしと

昭和五十四年九月四日（夫逝く）

九月二十四日

夫の死を 弔う客の絶え間なく
なげきつゞけて今日もくれたり

二十五日

和歌の師に 友は御縁を結びくれ
とまどい勝ちの心勇みぬ

二十七日

夫去りして 二十日の過ぎし秋の朝
叙勲のよろこび話し合いたり

かざり燈 いと数多くいたゞいて
その中央の夫のうつしゑ

二十九日

事々に 去りにし人の名を求め
亡きことを知るやるせなき日々

忽然と 逝きにし夫の顔みつめ
心つくせぬ事々を詫び

台風のことばにつゞき思うのは
永久の別れの発病の夫

眠りをば やすらかなれと祈りつゝ
秋の夜長のひとり居の我

亡きあとの 二十日の間訪い給う
友と語りぬ涙かくして

三十日

去年まで 一尾だけのおおろぎも
何を知ってかにぎやかな声

十月

一日

買物の かごの中には花麩など
夫の膳に使うもののみ

仏膳に 盛りつゝ運ぶ箸の先
在りし日の思い出に涙こみ上ぐ

ここ幾年 がおろぎの声単調なるに
夫亡き今年はわけてさわがし

夫逝きて はじめて渡る塩屋橋
秋風寒く思い身にしむ

玄関の 戸のすき間より配られる
新聞の音にまだ時早しと

十日

仏膳に あげるお経もすらすらと
となえられるはさていつの日か

十二日

忽然と 夫去りまして遺されし
わが身一つの余生にまどう

十七日

台風も 地震も案じなく
さとれる夫をしきりとうらやむ

十八日

仏前に 弔う客は口揃え
よい人だったとなぐさめくるゝ

十九日

夫は去り 台風続く今年(このとし)の
過ぎ行く日々よいそぎ足にて

念願の 和歌の師に逢う縁(えにし)をば
結びくれたる満中の品

スナツプの 遺影をまとめ入れし箱
見当たaraぬまゝ落ちつかぬ日々

朝まだき 秋の目覚めの枕元
メモにしばしの時を過ごせり

台風の 来るとの予報を知らされて
雨もり防ぐ一人居の我

在りし日々 敷きなれたれし坐ぶとんを
変わらず並べまぼろしを追う

不思議にも 段取りのよく進む度
守護霊となる夫に感謝す

意のまゝに 作りあげたる和歌なれば
発表するに心おくれて

二十六日（孫が遠足より帰り飴を持って来てくれた）

「長生きの 飴だ」と言いて手に渡す
遠足みやげと孫の顔

今日はなぜ 顔を見せぬと気にしつゝ
待ちかねる幼な友達

十一月

一日

店頭に 人だかりある売り出し日
見すごし通る夫のなければ

三日

孫をつれ 仮縫いに行く文化の日
海の向こうの娘に招かれて

ガス管の 仮橋の上にながながと
居並ぶかもめ秋の日うけて

街に出で 夫婦(みとよ)の姿ニ々と
角曲がるまでみつめおりたり

七日

とく度に 櫛にかゝれる白き髪
数多くなる秋のくれ

髪ときて 抜けたる髪をしみじみと
ながめてみればみな白髪なり

十一日(教え児に招かれて)

久方に 良き母のみのクラス会
招き給えり秋のよろこび

「先生よ 来ませ給え」と秋のくれ
嬉しさ身にしむ教え児の会

十九日

去る日には 焼香の客の中にあり
日ならずして今日はみほとけ

二十三日

さみしさに 心まどえて秋深し
ドラマは語る「孤独に堪えよ」と

老いてから この金言をさとるこそ
余生は強し「孤独に堪えよ」と

二十四日

買物の かごの中には魚、野菜
独り世帯にやゝ馴し来て

二十六日

軒つゞく 舗道の上のいちよう落葉
はき寄せる人のはく息白し

二十七日

手の冷えて 掃きよせる朝の道の上に
肉の残れる鳩の羽二、三

十二月

四日

明らかに 季節を告げるタイトルの画に
今朝は木枯し寒こと見ゆ

生前に 歩きなれたる散歩道
夫のまぼろし追いつ歩みぬ

五日

寒空に 老人の行く姿あり
逝きにし夫はせねて幸せ

六日

银杏散り 補導の出も見えかねるを
ためらいつゝもふみしめる朝

九日

数多く 並べる屋台の祭り日に
ひとり詣でる身にしみる風

十日

配られし 新聞の量(かさ) 今日はふえ
歳末商戦いともたけなわ

二十一日

かすかにも しじまをやぶる救急車
いづこの誰かの悲しみのせて

たき火しつ 人生のこと話し合い
年寄りのほほに吹くよ北風

夫去りて 空虚をうめる冬の日
寝巻き縫う針糸通りかね

二十二日

大小の ルビーの光りちりばめる
勲章のかげ夫はほほえみ

漸くに 届け給いし勲章を

骨納袋(ふくろ)につるす手に涙、涙

在りし日に この勲章をいただけは
歡び如何にと皆様の声

信じてる サンタクロースの賜りもの
「やった」とさけぶ紅顔の孫

たき火しつ 人生のこと話し合い
年寄りのほほに吹くよ北風

夫去りて 空虚をうめる冬の日
寝巻き縫う針糸通りかね

二十二日

大小の ルビーの光りちりばめる
勲章のかげ夫はほほえみ

漸くに 届け給いし勲章を

骨納袋(ふくろ) につるす手に涙、涙

在りし日に この勲章をいただけば

歡び如何にと皆様の声

信じてる サンタクロースの賜りもの

「やった」とさけぶ紅顔の孫

昭和五十五年

一月 一日

南天と 葉ぼたん活けしかたわらの

親子の猿のほがら

百八の 鐘終わりたるその時に

孫三人「あけまして」と声を揃えて

照る光 昨日につゞく春なれど

希望にみちる元旦の朝

大寒の 寒時計は五度をさす

気がひけつつも古型(ふるぎ) オーバー

大小の さざれ石にあおき萌え
見渡す干潟のあおき春日

十四日

塾生は「男先生死んだんね」と
思い出しつゝノートを出しぬ

二十二日

起き立てば すぐ目の前のうつし画の
守護紳に向う合掌の日々

在りし日に 腰の痛みをかばいくれ
寝具の上げ下げひき受けてくれ

二十四日

念願の 水仙郷に行く前夜
二、三、四時とみな時報をきく

見上ぐれば 水仙郷は花盛り
黄なるめしべは花びらに映え

太平洋に 浮ぶ沼島はどっしりと
ここが淡路と幾度もまごう

はしやぎつゝ 水仙郷のかたわらで
わだつみ右に友と昼食(げ)す

水仙の かおり一ぱいただよえる
淡路島の水仙の郷(さと)

見下せば うしろ姿の水仙は
気品も高く宮人思う

幾万株も 咲揃いたる水仙は
訪ねる人を強く引き寄す

(水仙郷の上灘は、亡夫(つま)の単身赴任先)

いとけはし 通勤道路と教えられ
亡夫の苦難の過去をしのびぬ

上灘の 道の危険も話さずに
通いくれたり亡夫ひとり堪え

二十九日

持久走 同じ服着る子等のうち
孫はトツプで目に踊り入る

寒つばき ひと葉のゆれるすき間には
みつをついばむ笹鳴きの声

大寒に 番くるわせのあたたかさ
ひるげの庭にうぐいすの影

ひんやりと 感じる度に重ね着し
まくら辺に積む衣類の小山

二月 一日

きさらぎに 粉雪舞いて独り居の
亡き人に告ぐ結婚記念日

四とせをば 数えて迎う金婚を
楽しみたれど遂に逝きたれ

きさらぎに 粉雪舞いて独居の
わびしさの中憶う結婚記念日

五日

独り居の 広くなりたるざしきには
大豆あちこち立春の朝

六日（兄は逝く）

残されし たった二人のはらからの
兄は逝きたりきさらぎの午後

子を亡くし 年を重ねし兄君も
まわりに感謝し安らかに逝く

急を聞き 五分もたたぬその時に
かけつけたれど早声もなし

入院を しばみつゞけし老いた兄
痛みに堪えて遂に逝きたり

二十六日

今日も亦 人の命のかるがると
若人の手で母をあやめき

若きより 共にかせぎし老夫婦
知り人の手で命断たれきき

シンナーで 家族四人の焼け死とか
果知らず行く青年の摩手

きさらぎも 半ばとなりてひとりでに
口ずさみ唄う早春の賦

新聞の 折こみにつく旅ポラン
待かねとじし人は今なし

ハモ二力を 吹く番となり見守れる
祖母の鼓動高しPTA

目のさえし 寝つかれぬ夜はおのづから
神に眠りを今日も祈りぬ

師の君を 思いつづけて箱づくり
きさらぎの午後またたく間にすぎ

歌づくり さしのべくれ友垣に
感謝をしつゝ箱を化粧す

古箱も 千代紙はればほのぼのと
君にとどけん気も高まりて

おさなごの 病をたくし紙雛を
流すならわし永久に続けと

(浩宮様の立太式)

継君の いとおごそかな成人の
み姿見やる母愛高し

朝毎に 水のかげんをためし見る
シクラメンの花せいぜいと伸び

外出にも おつくうとなる日毎には
テレビの梅にねぎらわれている

カニランの 葉先につけるひなつぼみ
今日は咲たりあでやかにさく

風いまだ 冷ゆもカニラン咲きそめて
春は近しと話しかける

甘ずっぱい 香りを放つ沈丁の
匂をたまいたり君は今日は亡く

おさなごの 病を托し手づからに
紙びな作り流す母尊し

三月

思い出は 善きことのみと話しては
夫亡友と涙ふきつゝ

お互いに 亡き夫のこと話し合い
弥生の午後はしめつぽく過ぎ

三日

娘は嫁ぎ 箱に納めし雛人形
かざり給えとひそやかな声

十日

夫は去り 五月(いつつき)の日も過ぎぬのに
兄を亡いいよいよ寂漠

出かけるも おつくうとなる日毎には
テレビの梅にねぎらわれている

ふる里に 帰りし歌人の口ずさむ
やさしき母の子守唄かな

修身の 文字も消えたる昨今の
新聞記事に目をおおうのみ

十五日（友の令息の結婚を祝して）

待ちかねし よろこびの春迎えられ
お家のかおり幸なる日々を

春のこと いとなみ伸びてお互いに
喜び交わす日々であれかし

十七日

二人して 桜見に通りしも
今日は彼岸の墓参の道と

若緑 よむぎが多く伸びきそい
草もち作り手つきなつかし

くさもちを 作る周りに母かこみ
おさなご達のよろこびし顔

十八日

ひとり身と なりたる人のつみくれし
ふきのとう一つ夕餉になさん

さみしさに 堪えて摘み草したる人
味合え給えとふきのとうゆび

在りし日の 日記を出して夫の字を
つぎつぎ探す春彼岸かな

風寒く 日だまりにさす春の日を
うけつゝつめり友と話しつ

教壇に 立ちたる我のたのしみは
海の彼方の教え子の声

二十五日（長女、次女を訪ねて）

久方に 娘の先々を訪ね来て
春の日うける孫を見上げぬ

（清荒神に詣でて）

参詣の 群に交れる孫たちは
背丈ものびて笑顔美し

線香の 煙を浴びて健康を
祈る人々お堂を囲む

はれやかに かざる店々幾百と
つゞく参道清荒神

離れいる 二人の孫の通信簿
読み入りうれし光る師の筆

娘は二人 孫は四人であでやかな
桜並木の宝塚の午後

和歌のこと しばしの間話したに
「祖母、はつらつと孫詠んでくれ」

まるやかな 少年の手でこの腰に
愛のマツサージ涙してうけ

右は杖 左は愛のささえうけ
夫亡き我もドリームランド

父様の 尊い汗の月給袋見て
歡喜の声は仏間にひびく

三十日

孫の顔 あごに見え初むひげらしきひげ
そり方教えるはじらいの父

四月

二日

あきびんに 活けてながめるせりつくし
たずねる人はなつかしとほめ

すすき原に 萌えしつくしの丈のびて
煮付けてくれし昔なつかし

友見舞う 田にに沿う道の溝川の
しじみ採りたる昔もあつき

山の上の さくらの盛り聞きいても
腰の痛みで春は過ぎゆく

一本(ひともと)の木にはつきりと若芽ふく
あじさい活けてしみじみ春を

(五百羅漢を訪ねて)

四十年(よとせ)前 生徒と共に訪いたりし
寺なる庭にさくら咲き満つ

四十年過ぎ 再び訪ひし野の寺の
羅漢の姿今も変わらず

まれに見る つばきひき立つ桜花
西にけむりて残花美し

温室の ま白きハウスを背景に
羅漢のさくら今盛りなり

らかん坂 ちりつめたりしはなびらの
雨の流れにぬるゝも動かず

蓮華寺も 目近となりて群れさける
さくらの白し雨にけぶりて

桜の木 れんげ畑を下に見て
花時の美を人々や知る

花時に すばらしき美を眺めつゝ
れんげ畑で昼食(ひるげ) 食(は) みたし

見渡せば 古寺はさくらに囲まれ
幽(しずか) なる寂(さび) 心打たれぬ

(友の金婚を祝して)

友垣の 金婚の日をことほぎて
黄金色するフリージャ持ち

夫あがめ 強く手を取り金婚の
よるこび永くつゞけ給いて

友垣の 金婚の日を迎えては
亡夫とちぎりし思い出悲し

五月 十一日

美しさ たとえる言葉なきときく
フラワーセンターに心いさみて

真白き パンジー広く咲きそろい
迎えくれたり入口近く

時おりに 雨水吸へと植木鉢を出して
しばらく雨期の空見る

大輪の ボタンに見えるその花を
ベコニアときき賛嘆の声

苗を売る 棚の前には大ぜいの
花を好めるにこやかな顔

洋蘭の 部屋に入れば摩女のごと
花の姿にひきこまれけり

珍して 汗ばみながらはつま路の
東條湖畔サープコースター

かおりよき オレンジみのり手つくりの
ジャムを届けり初夏の日を受け

ふる里の ベコニアの花小輪なれど
ぼたんとまごうセンターの花

二十日

光州の 騒乱の画に目をおおい
いよいよ日の本尊くあがめ

光州の 惨状しきりテレビあり
日の丸のもと有難き日々

幼子を 背に負う兄の姿あり
食糧を頭上の母光州のみだれ

二十五日

一票を 乞う声の今日もかしましく
されど影なし投票の午後

三十日

わかき母 両手をかたくつなぎつゝ
やさしくかたり信号を待つ

満開の ばらも美わし入梅の
しづくこぼれる花も美わし

古箱も 千代紙はればほのぼのと
君にとどけん気も高まりて

風はまだ 冷ゆもカニラン咲きそめて
春は最近かと話しかける

甘ずっぱい 香りを放つ沈丁
句を給いたる君は今亡く

ひとり身と なりたる人のつみくれし
ふきのとう一つ夕

あたたかき 春のおいの上着をば
赤きカーネーション添えておくらる

六月

三日

舗装路の あるかなきかのすき間より
夏草のびてそよぐ梅雨晴れ

整然と 三角形の田の面まで
早苗はゆれて夏の日きらめく

ひざの痛み いやさんために初夏の日の
灸に涙をためいたりけり

五日
夫去り 心の穴もラジオにく
うずめられている初夏の午後

二十七日
歌づくり 迷える母「浜茄子」を
送りくれたりみちのくの嫁

七月 三日
川ざらえ シヨベルカーのあしあとは
川面にえがく縞模様長し

七日
人の云う 喪のトンぼとりきらわいても
葉先にあそぶけなげなる眼よ

八日
広すぎる 制電布の上になて
効果を待かね行くみちのくへ

梅雨晴れの 木の間をぬいてくるとんぼ
夫亡き庭に今日もとび交う

十四日

独り居と なりてはじめの誕生日
ひねもす受ける祝いの言葉

梅雨明けも 間近となりて晴れ間には
さわやかなれど日ざしはつよし

十七日（次女より「錦松梅」を送ってくれて）

ひそやかな 朝餉の膳に菊かおる
器の中は錦松梅なり

二十日

お互いに 元気なればとクラス会
指折り待し梅雨明けの頃

つぎつぎと 痛みもふえる我なるも
話し合わせばあきらめもつき

八月 十二日

新仏 迎えるためにあれこれと
運ぶ手先も亡夫と話しつ

朝まだき 鶏頭持ちて墓掃除
たむろする蚊をみたまの使者と

十五日

おくり火も 河原に燃えて亡き人の
みたまは高く極楽路指す

十七日

冷夏とて 庭木にとまる蝉の声
立秋までに稀にかしまし

一年は またたく間にすぎ縁側に
つるす灯籠けだかく涼し

九月

五日（仙台への旅に出発）

残暑あり 初めて乗りし高速艇
巨船あまたの神戸の港

六日

夫逝きて 一周の忌の明くる日に
母をねぎらう空のプランを

それぞれに まわりの子等は手分けして
母をいたわり機上の人に

銀白の 帯の間に流れいる
紺壁の波筆舌覚えず

降下する 知らせがありて海と陸
線あざやかに早速仙台

幸わせな 機上の旅に集う人
続きに続くさすが空港

四人もの 子育今日は実りたり
いたわりをうけ杜の都へ

坐す事の 難となりたるこの母に
椅子を求めに車走らせ

七日
みちのくの 庭をかざれるほうずきの
色あざやかにわれを迎えり

漸くに 心をきめてみちのくを
たずねし吾も心満ちたり

九日
静かなる 杜の都に尾花はゆれる
友思い出し便り幾通

小雨なり 庭のコスモス色さえて
みちのくの秋今日も深まる

庭に出て 草ひきしようもしぐれのみ
あまたこほろぎ静かにすだく

ふるさとを あとにしてより二、三日
みやぎの秋も長く思えて

「浜茄子」の 歌集をよみて今更に
我とのへだて遠く思えて

四、五日の 滞在の日はしぐれいて
コスモス多く明るさを添え

十一日

十三号台風 みちのくの秋近づきて
近くの尾根の濃霧は強し

扇形の 範囲に入るふるさとの
災害なきをひねもす祈る

一じんの 風のうなりにおどろきぬ
近づきたるや十三号台風

コスモスに はさみを入れる嫁(こ)の姿
かをりはみちる仙台の秋

十一日

色々の 花咲きのこる花園に
久しぶりにて青空はるか

コスモスが 背高かにのびた庭に出て
タイヤの椅子で秋風をうく

あどけなき 魚屋さんのレコードに
団地の主婦は魚を求めて

十四日

造成地 広がる団地立ち並び
尾花なびけり秋の日ざしに

なみなみと 水たたえたり釜房の
まわりはるけく山の美の秋

川原には テントを張りていも料理
かこむ人あり名取川辺に

目の前に 小島を浮べひらけたる
釜房のダムきし辺ははるか

伊達公の 偉大な徳の高さをば
物語るなり 殉死の墓石

石棺に 納められたる 蒔絵の文箱
金色美なり 掘り出されしに

重宝の 瑞宝殿も空襲の
災うけて再建の美を

十五日

青葉城 木の間に見える 絵模様の
つらなる 彼方塩竈の秋

晩水の 碑石の前に たたずみて
孫に 教えつ 歌う 荒城の月

壮大な 仙台駅人の波
吾ひとりなり 杖つく人は

秋の日の けやき並木に 集いたる
青年の 森合奏ひびく

上がり下り エスカレーター 人の波
見失いし も息は背高くて

アイドルの　くるみ、野うさぎ顔によ
寝顔ほころぶ孫に見入りぬ

さわやかな　朝な朝なの迎えの車
息の仕合わせをおがむ母あり

てぜまなる　庭にさきたり秋の花
見上げる空に雲ひとつなし

十七日

「かにつこ」で　珍しき味つきつきと
舌づつみうつつ仙台の宵

いとながく　つづいて見えるけやきの
右側左側は人々車

広大な　噴水立ちて水面は
五色の波や蚊さえあおぐ

水面に　幾々線の噴水は立ち
しばしのあとは低き線の美

よろこびて　噴水の美をたたえつゝ
まわりを孫は馳せめぐるのみ

食膳に のぼる味にはみちのくの
数多き色ひとしおうれし

一番町 若き人のみ目につくに
杖持つ母に手をのべ給う

仙台の 夜景みせよと八階の
屋上高くなさは深し

あちこちに 光美しイルミネーション
仙台の宵にぎやかに更け

十八日
優雅なる みちのくの味気を満たし
島にかえる日近き早秋

十九日
萩まつり 日頃見なれし雑草の
名もうるわしく名付けられたり

大芝生 かたむきのよきひろっぱに
ころころころとおさなごあそぶ

白はぎと みやぎの萩はいりみだれ
優雅の味よ萩まつりかな

萩まつり 呼び名も高きトンネルの
しだれ萩間に小雨けぶりて

二十一日（帰途につく機上より）

雲間より 山並見えて人家さえ
あざやかに見え浮雲に消え

一月 十八日（友の喜寿を祝して）

幾山の 谷を越えられこの長寿
まわりの人とめでたさ祝う

ガラス越し 初冬の日ざしうけながら
日毎数えるカニランの花

和五十六年

一月 八日

送られし 小包みのひもとく手には
むすびし人のあたたまりあり

美わしき 「花そうび」なる自由誌に
さみしさうめる筆ぞいれしき

初孫の 大学受験もめぐり来て
亡夫に祈りて今日もくれたり

初孫の 合格の報つぎつぎと
電波にのりくる如月の日々

入試をば 気にしておく娘の愛に
こたえて今日は合格の声

さとき孫 大学入試の時も来て
祈りつゞける亡夫のみたま

漸くに 孫は大学合格し
わが娘もいよいよ母らしくなり

努力積み 今日の入学手にしたる
母のよろこび顔にあふれて

菜種づゆ 漸く去りて大学の
庭に萌え出たたんぽぽを笑み

入学の 祝の昼食(ひるげ) 食む庭に
よろこびの父母円をたむろす

入学の 若人校庭(こわ)にあふれみち
さくら並木も今日は真盛り

五月 十六日

川土手は 風尚寒くふきわたる
つくしがしつ靜かなる午後

亡き夫と つくしつみたる川岸に
今年も春をさがまわれり

三十日(クラス会へ)

足腰の 痛みの話持ち上る
クラス会名「白百合」と決め

物忘れ 多くなれると口々に
話し合いてははげみを覚ゆ

口ずさみ うたい出したる小学唱歌
七十余年の年令(とし)を忘れて

六月 六日

のき下の 植木にまじるかすみ草
淡くは白にかれんにゆらぐ

二十日

田植機の とても使えぬすみずみに
早苗は根づきそよ風にゆれ

色交じる あじさいの美に打たれつゝ
夏も最(ま)近(ま)としみじみ思い

いただきし 三つ四つなりしさくら草
今は吾が家で盛り上がり咲く

二十一日(姪の三回忌)

愛深き 母と別れしおさな児の
念珠をおもちやに早三回忌

七月 十四日

いとやさし 少女(おとめ)の言葉うれし
くり返し読む梅雨明けの宵

十五日

河口まで はるかに遠き川岸の
州にまよいきし白さぎ清く

八月二十六日(亡夫の納骨のため高野山へ)

亡き夫も いやよ高野に登る日は
秋の気配もしのびよる朝

久方に 旅らしき日の船の旅

納骨袋(のぶくろ)をひざに高野の山へ

亡き夫の 納骨袋抱きて話しかく

大彌陀(みだ)として登り給えと

おだやかな 波の面なる大阪湾は
ひざの上なるみたまと話しつ

船上の 眺めに入る淡路島

峯はつゞきて雲の彼方に

納骨の 袋も昇る仏壇は

今日より一人さみしく覚ゆ

十月

四日(クラス会に招かれて)

教え児は 幾山河を無事越えて

今日の集いの如何にうれしき

夫去りて さみしさ荷のう老の坂

教え児と逢うよろこびの秋

教え児よ 心の痛むその時は

「思いかえる」をくらしの智恵に

賜れし オルゴール入る人形の
かなでる秋につゞく思い出

初光り うけて回われるオルゴール
児等の幸せ今日も奏でて

十日

島山の もみじ緑に映え初める
我をみつめる連絡船上

三十日

今日も亦 やるせなさきにいらだたし
みたまと話す秋の夜長に

目覚めては 今日の生命い感謝して
今年もはげもう元氣を出して

昭和五十七年

三月二十二日（教え児の大学合格）

さくらさく 島をあとにし出で立ちぬ
父母と妹子のまなざしあとに

五月 三十日（知人の披露宴）

結ばれし 今日のよるこび無上にうれ
栄えを祈るみどり濃き日に

六月

年齢(とし) 寄する 母をはげます娘の心
ベストセラーの本を届けて

軒下に 植木並べる人多く

初夏の道辺に鳥どりの花

祖母思い 会津の旅のみやげにと
和歌のつきたる絵葉書便り

二十三日

東北の 新幹線も開通し

仙台、仙台でみちのくの息にはせ

七月

三日(亡夫の誕生日)

誕生日 赤飯供え語り合う

亡夫の眼ざしあじさいのごと

六日(高血圧で体調不良)

変調に おどろきまう夏の朝

時間きざみの生活(くらし) が因(もと)

手のしびれ 一人増せる血圧の

業(わざ) と気づきて安静を誓う

眠りをば あたえ給えと祈れども
しじまは長く不安にまどう

漸くに ひと時眠れしうれしさに
手足のまさつすぐ始めたり

安静の 時は静かに流れいく
しじまを破る雨蛙の声

壁かけと 編みて賜いしフクロウの
おどけまなこに客は笑いを

十四日(孫からのプレゼント)

世は進み 横文字の飛ぶ映画面
英和辞典を祖母に贈(ぎ)れたり

あじさいの 咲く朝まだき新聞の
がんと戦う詩に力づく

八月 二日

十号の 台風過ぎる知らせあり
蝉は飛び来て一過の空に

打上げる 花火の音の遠鳴りを
入浴しつゝきく夏の宵

残暑過ぎ ツクンヨーシと鳴く蝉の
声のすがたも庭に来ぬ夏

蒸し暑き 一夜もなくて秋となる
不自然の夏余禍は無きかと

二十三日

日ぐらしの 声もきかずに秋の雲
静養の日々しのぎよかりき

初盆の 燈籠のかけゆらいでは
亡夫のことばとしみじみ憶い

三十日（燈籠流しの日）

浜辺には 新盆みたまかゝえられ
かざり美し燈籠の影

小さざ波に ゆられゆられて燈籠の
火影をみつめ別れ悲しき

九月 十八日（冷夏を想い）

毎秋に ながさめくれるこおろぎの
今年の秋はそのかげもなし

庭石の かげに住みつくこおろぎの
声一つなくこの年はゆく

十月 二日

朝晴れて はつきり薫る金木犀
植えつけくれし亡母（はは）の手しの

蒲の穂に クスモス添えて紙つつみ
友の香りは金木犀のごと

一月 十五日

師のまなこ 開き給えず秋深し
見舞しわれにさし出しし手を

教え児の かしらも白く見ゆる秋
恩師の危篤悲しこよなく

十八日

父母に継ぐ 恩人として慕いたる
師の君遂に語れぬ人と

二十六日

小包みを 開ききるまで十重二十重
結び給えるけだかき君を

昭和五十八年

二月 一日

夫在らば 金婚の日と思いはせ
独居の窓卯月の雨

八月

(地鎮祭)

朝まだき 油ぜみの声かしましく
新築のくりやにひびき入る

新しき 家に住む子等永久に
幸多かれと祈りに祈る

九月

十日(棟上げ)

初秋の 風にただよう新しき
木の香は運ぶよろこびを

桃色の タオルを首に大工人
祝ふりまき木組の中を

美しき 島の山なみあざやかに
祝扇は高々に見ゆ

餅拾う 人々の声こだまして
阿部家の栄は四方に満ちたり

拾つたる 餅を手に手に持ちかねて
互い見せ合う笑顔ほがらか

秋の日も 西に傾き夕ぐれど
祝の宴はいよいよ盛会

良き友を 多く持つ身の歡びを
胸底深く繰り返したる今日

壁下の 竹組みの色あたらしく
工事は進む急ピッチにて

カンカんと 今日もひねもす槌の音
見上げる屋根に板も張られて

新築の 庭に堪えたるこおろぎの
友の愛にて今宵にぎやか

一月二十九日

にしき織る 山の瀬に建つ真理の碑
冬の光りは永久に輝く

にこやかに 水をたたえる水源池
みなぞこ深く神は光りぬ

真理の碑 高くそびえてとこしえに
調和の真理授けつゞけて

二月二十五日（新築完成）

文明の 器具も備えし新築の
よろこびにかえなぜかさみしき

一言で 満ちた気持ちでとなるものを
その一言に吾はさみしき

年代の 違いとかたくはねられて
人の道さも通せぬ老の日々

昭和五十九年

一月

元旦

初光り とても輝く今朝の空
今年の日々こそ楽しき希う

初光り うける日の丸結ぶ手に
凍えを覚える年頭の朝

十九日

九州の旅のみやげと買いもとめ
魔除けの鈴に孫の純情

この島に 四度の寒さの続く日々
魔除けの鈴を鳴らしてぞみる

三十日

この年の 睦月も今日は終りの日
雪どけの音独りしみじみ

雪どけの 尋ねる人が戸惑うほど
しきりに聞ゆぬかるみの午後

この年の 寒さもいよよきびしくて
春待つ心しきりなる日々

凍える手 今朝もボタンをかけ兼ねて
しみじみ思う年のせいかと

音もなく 気づかぬうちに島の雪
久方振りに薄化粧の美

相手なる 人の立場を思うとき
暗き思いの痛みもとけて

残された 日々を楽しく送るには
和の 一文字に光りもとめて

五月 二日

紫の 色もけだかきみやこ忘れ
数を数えてひとときは過ぎ

十二日

衛星の 国土の空をかけ巡り
大東島にも初の放送

十三日

小包みの 送り状には娘の名前
つらねて届く母の日の午後

あちこちの かおりを愛のしるしとし
五月晴れなる母の日うれし

十五日

川口より はるか遠くにのぼり来て
白さぎ一羽河岸あさる

お元気と 握手で交わすにこやかに
外はさわやか新緑かおる

お互いに 一日一日大切に
次の集いを誓う白百合の会

十七日

東洋で 一位をほこるつり橋の
橋げたのもと潮騒白し

友垣の 愛の招きをよろこびて
眺めはるけし大鳴門橋

文明の 粋の極限実現し
阿波と淡路は近くつなげり

らんかんと 並んで走るドライブに
新緑にはえ大橋つゞく

八月 十四日

朝まだき 境内の中ひろびろと
こずえに高き蝉の声

境内の 敷石の上腰下ろし
しじまの中で吾をみつめる

油ぜみ あたりかしましその中で
一声高しひぐらしの声

氏神の み前にはべりひたすらに
当選祈る人々を待つ

十六日

座しながら チャンネル変えるテレビ
求めし我の如何に幸せ

喜寿を過ぎ 子等の事々はなれ行き
吾身ひとつの思いにて過ぎ

客訪ては すぐ立ちかね痛みあり
気細き日々はつゞき続きて

ひとりでに 伸びぬ腰をば感じつゝ
杖をたよりのまどろしき日々

時をきめ かしましすぎた蝉の声
盆をすぎれば静かなる朝

二十五日

当選の よろこびの声聞きたけど
情勢ききて不安なる今日

大勢の 縁ある人に願いたる
甲斐あれかすと胸は痛みぬ

九月 一日

こほろぎの 一声さえも聞けぬ庭
新築のため秋はさみしく

こほろぎを 持ち給いたる君ゆえに
庭に放ちて初声を待つ

二十五日

新築の 庭に絶えたるこほろぎを
友の愛にて今宵にぎやか

いただきし 虫の鳴く音に秋の夜は
心にぎやか幾夜もすぎぬ

十月 十七日

木犀の 香りただよう朝まだき
朝顔の実は日毎にふくれ

みちばたの 尾花のゆらぐかたわらの
朝顔の実は固く黄ばめり

数多く 庭に放つたこほろぎの
鳴く音も絶えて重ね着もふえ

こほろぎの 鳴く音もすでに絶えたけ
来る秋待つ心めぐりて

二十日

生き残る ただ一匹のこおろぎの
声のありかをうかがつてみる

秋風に 朝顔の葉の黄ばみふえ
種の実りを数えたのしむ

二十二日

みちのくの 息子の著書は完成し
老母の喜び天上を越す

軒下の 愛の植木の水やりに
通る人毎皆話し連れ

ゆりかもめ 今年も早く川上に
舞いおる姿水にうつれり

一月

四日

かれんなる 葉に包まれコスモスは
見る人々の心やわらげ

次々と 支障のふえる晩秋に
コスモス散りて心さみしく

日々通う 電治院での友ふえて
話し合えるを楽しみにして

十八日

ボタン穴 小さくなきにかけかねて
そのはがゆさに麻痺の手を見る
意気地なき 一人となりて終らんか
明治生まれのさみしき余を

二十日

時々の 胸の痛みを覚えては
感謝の二字で打払う日々

昭和六十年

一月 十日

厳寒に 届け給いしスカートに
厚き真心生地にしみ入る

二十三日

「老い先の 独り暮しを楽しむ」の
記事切りとりてブックにぞ貼る

「しあわせの 引出し箱」を読むようにと
大寒の朝小包みの音

朝早く 目覚める度にラジオ聞き
ひそむ訓を心にとめて

独り居を 楽しむまどを思いせで
思い変われば日々は明るし

我さしで 相手を計る余生には
吾さし長く心痛みぬ

吾さしに 合わぬことには目をつぶる
不甲斐なれども吾の性格

三月

一日

思い出の 盛り上りくる沈丁華
春雨をうけ植えつけてみる

沈丁華 一句を送り給いたる
去りにし君は旅のいずこを

卒業の 声の聞こえる頃となり
沈丁の香りしのびよる

老いてゆく 現実みつめ策もなく
旅のアルバム思い出を追う

パンジーと デュシーの小苗求めきて
土をえらびて根づくを願う

冬の間は 枯木と見えしあじさいも
やよいの光に若芽ふくらむ

漸くに 根づきくれたる沈丁華
香りも高く亡き君思う

庭に出て 香りの根元に立ち寄れば
蕾の開きし沈丁の花

二つ三つ 春の草花求め来て
朝な夕なに話しかわせり

五色の 草花ながめ漸くに
根づきし鉢に水やる春

四月二十二日（入院）

夜半となり ベル押す手先気兼ねする
はかなく思い暁を待つ

同室の 方のやさしさ身にしてみても
お礼の言葉も涙でさえ

色花は かすみ草にうつり映え
室にみつみつ歡びの声

看護婦の小走りの音打つゞき
今日もあの世に逝く人のあり

二十九日

天皇のお齡はいよいよ八十路すぎ
初夏の香りはことおぎ高し

花好きのお見舞い客は々々絶えず
病室の窓いとも華やか

五月

一日

気にかゝるインシュリン療法の
時は来りてシヨツク大きく

療法の最新式をうける身の
再起の日をば楽しみに待つ

再起して又人のため残る世を
過すを努めと心に決めて

日照り草植えたあるじは入院し
咲き揃つたる園をうかべて

八日

撮影の技師の手荒さ身にしみて
老人のためやさしくたのむ

お見舞いの 美しき花新緑の
朝の空気に香りみちみつ

十日

今日も亦 蘭をみたさに歩行機で
活けられし花しばし見つめて

美しき 蘭の花瓶のさし水を
歩行機に頼りコップを持ちて

賜りし 蘭を活けたる花瓶にと
歩行機押してさし水をする

病室から 新緑かおる先山の
観音様に全快を乞う

病院の 窓わく握り屈伸の
運動はげむ初夏の朝夕

十一日

母の日の プレゼント持ち孫の手で
活ける花瓶に光り輝く

病院へ 届けられたる初孫の
愛の寝巻きを母の日に着る

十七日

挑戦の 気早まりて病院の
夜半にたちかね前進はやみ

三十一日

入院時 葉っぱばかりのカニランの
赤き花芽は過ぎし日語る

六月 一日

人生の 終りの日まで注射する
吾が身となりぬ五月も過ぎて

豪華なる 蘭の王者は速達で
送り給える堺の君よ

物療の 窓を仰げば初夏の空
吾が身の姿みじめなりけり

輪を廻す リハビリ効果楽しみに
車椅子押し病棟を行く

手のしびれ とても注射はでき難く
気は重くなり夜はねむれず

八日（退院）

植えおきし 玄関脇のつめきり草
咲きて迎える退院の日に

朝まだき 杖をたよりに水やれば
久しぶりにて待ちかねし顔

起き上り 足の具合を気にすれど
どうも進まず憂慮する吾

十日
年寄りを 憶う愛情うれしくて
大いなる字の辞書を給えり

十二日
梅雨晴れに 手押し車に任せ切り
よくなりたくて散歩してみる

十四日
十年は 長生きすると医師の声
がんばり通し注射針さす

サツサツサと 足重くして事々の
運びも遅くじれったき吾

四人もの 子の親なれど八十路近く
心の頼り吾身ひとりと

二十日

このごろは 気兼ねに明けて気がねに暮れ
しみじみ余生さみしと思う

一眠り つぎは寝つけぬ夜の空気
しじまの気配ひとりさみしく

朝夕の 食事の膳をうける吾
しびれる両手を合掌つゞけ

七月

八日

静養の 日も早々と一ヶ月
尚なれやらぬ我はうとまし

目覚めては 今日の外出考えて
がんばり運ぶ脚の重きを

前向きの 心境欲しくきめたれど
雑念浮び後もどりする

十日

親として 責任果し今日はもう
日々の幸せ感謝一途に

まどらかき 気持ちですますそのもとは
誰にたよるもその術はなく

十四日

送られし よろこびの花しげしげと
ピンクの香り君をしのびて

ピンクなる 花びらのもと紫と
レッドの芽花華麗なるかな

誕生日 よろこびの声電波にのり
傘壽に近き吾はうれしく

ふるえる手 カードを送り給いたる
師は今いづこ黄路の旅の

十八日

朝まだき 朝顔の数指さして
そよ風うけて水をやる日々

二十日

ふっくらと うすみどりなる白瓜の
君と等しくまどらかさみつ

手作りの 品々すべて香りあり
君のすがたをしのぶ梅雨晴れ

八月 十五日

新築の庭の土にはこおろぎの
住家はなきか一声もなし

去る年のこおろぎの声聞きたくて
庭石上げて一声を待つ

やれ嬉し初音を聞いたその宵は
風は涼しく時を知らせて

台風に打たれしものか今宵には
こおろぎの声一声もなし

小粒なる紫の色気高くて
君をしのべる紫式部

九月 二十日

名月を かいま見んとて夜半に起き
漸く雲のすき間より見る

十月 四日

友垣と話す昼間は短くて
夜半のひととき無上にさみし

十六日

信仰の 日々を持ってよと教え児は
老の吾身に聖書めぐめり

数多く やさしき心根いただきて
ひもとく吾の心はべめり

かるかやと コスモス活けてしみじみと
今年の秋の深まりを知る

昭和六十一年

二月

(義姉、入院)

姉の入院 ひとつとならず反省し
杖をたよって日々は過ぎ行く

何もかも 時間割のごと定まりて
二月の半ばの日々は過ぎ行く

五月

八日

去る年に 取り入れたりし朝顔の
種蒔きをして芽出し待ちあぐ

一日に 三十一 (みそひと) 文字を心して
己が余生の足跡として

退院後 氣重い日々にあきあきし
心早めど一首も浮ばず

九日

朝日つけ 伸びる若芽の長さ見て
神のみ業と感じ入るなり

苗植えし 夕顔の芽の伸びてゆく
様子を見ては元気づけられ

久方に 水やる吾を見つけては
立寄る友は今日も増えたり

十四日

もの忘れ ひどくなりたる吾が姿
八十路も近きとあきらめてみる

起き出でて 手足のしびれ重き日は
感謝すること無理に探して

二十日

活け花に 水変えるも思いやり
捨てかね活ける都忘れ一輪

台湾菊 朝な朝なにふくらみて
蕾も色増し二輪はひらく

六月 八日

退院後 早ひと年(とせ)は過ぎ去りて
たいくつにあき三十一字を

昭和六十二年

五月 五日(初月給で柱時計を贈ってくれた孫に宛てて)

贈られし 柱時計は孫の愛
ゆうがな音に五月は開く

昭和六十三年(入院し、闘病、療養生活に入る)

三月 十二日(嫁から送られた歌集を病床で読みつつ)

やさしさの 母想うての「かだんの華」
読みたけれども重くつづかず

三月 十九日

カーテンを 開けてくれれば卯月日の
つよい光に島山つつみ

入院後 一ヶ月はすぎたれば
窓辺をつつく鳴門小雀

明けくれば 思うこととは只一つ
新しきリハビリふえることのみ

四月 十一日

卯月には 瀬戸大橋も完成し
いよいよ日本も狭くなり

朝まだき 鳴門の雀 ものごいに

五月 十四日

ああ美し ピンクと紅のカーネーション
賜いし人はいかにうるわし

葉桜も 春深まるとみどりにはえ
リハビリ待つ間も千々に思いが

五月 十七日

点滴の 最後のしづく見終るまで
今日もうつろな心がつづく

平成元年

三月 四日

早春の 光をつけて秒針の
きざみを追って今日もすぎ

十一月 五日

晩秋の 午後娘と孫に乗せられて
潮風かすむ淡路かな

平成四年

「ふれあい」 山上病院・鳴山荘
職員患者親睦誌

「ふれあい」第一号、「創刊号」(四月十五日発行)から

入選

いく度も しぐれしベットのの上に伏し
やさしき一言に嬉し涙を

徳島は 冬将軍も訪れず
テレビを見て雪景色味わう

梅雨晴れに 車椅子に乗せられて
潮風受けて花園を見る

菜種梅雨 選手の胸に泥の跡

目ざめれば つぼみはひらき美しく
香り身にしむ母の日の朝

教え児の 心つくせる小包みに
涙ぐみつつまた春は行く

みちのくを 飛び立ってより鳴門路へ
徳島に病む我を看もうて

「ふれあい」第二号、「夏季号」(六月十五日発行)・増刊夏季号(七月十五日発行)から

遠くより 送り給いしカーネーション
つぼみが開く母の日の朝

八月二十五日（婚約直前の孫の相手に宛てて）

待ちかねし 孫の良縁成立ちて
うれし毎日送る残暑の日々

「ふれあい・第三号」秋季号（十月十五日発行）から

特選

末っ子の 名刺の紙は薄くとも
肩書き増えるうれし移動期

入選

梅雨もあけ クーラーの動きを受けて
かすかにゆれるひも風鈴

面持ちが 小麦色なる監督の
汗と涙のインタビュー

「お母ちゃん」 まくらべに立つ末っ子は
出張告げてすぐに消え去る

アナウンサー 日毎に変わるネクタイの
陰にひそめる強き愛の手

ともどもに 力合わせて晴舞台
送る拍手に瞳うるみて

誕生日 おもちゃちりばむ頼信紙
押せば奏でるオルゴール

入選
目覚めれば うちわ手捜す残暑の夜

台風の 行く方を案じ気象情報

平成五年

「ふれあい - 第四号 -」新年号（一月十五日発行）から

名月や 兔餅つく影もなし

松竹梅 孫の結納薫る秋

銀杏の木 落葉踏みしむ響きあり

特選
我娘には 痛い所を話さずに
帰ってもらおう立冬の午

入選
寝つけずに 短歌の五字に思いつき
秋の長夜は足早に過ぎ

佳作

教え子の 送り賜える俳句より
故郷の四季広く思えて

敬老会 紅つけて手おどりし
若返りしとほめたゝえられ

秋日和 晴れのマークが満ち満ちて
緑の土地にはえる気象情報

アナウンサー 服と良く合うネクタイの
柄美しくすがしい顔

あちこちの 痒さ身にしむじれつたさ
寝つかれもせず夏至の夜はふけ

日の出待つ 窓の外には一幅の
素晴らしき空に心うばわる

寒霞溪 紅葉の錦下に見た
昔の旅の広き思い出

次々と 孫の良縁まとまりて
めでた事きく嬉し秋の暮れ

二月 二十日（孫の結婚式でいとこ全員が歌った曲「乾杯」のオルゴールが届いて）

結婚式 いとこ全員集まりて
若人の意見盛んなり

ピンクなる 愛をかなでるオルゴール
贈りたまいて記念の曲を

「ふれあい―第五号―」春季号（四月十五日発行）から

手なれたる 母の仕立てしドレス着た
娘の姿いやにあでやか

朝まだき 熱きタオルを頂て
今日一日を感謝にくれる

結婚式 いとこ全員集まりて
若人の意見旺んなり

ひな節句 贈りたまえるお人形
可愛いひとみと見つめあいて

入選
みちのくに 雪のマーク居すわりて
孫子の様子気にかかる新春

次々と 良縁結ばれて
目出たきこと聞く平成五年

七日がゆ 母の歌声思い出し
七色の草数え見る

枕辺に 置かれたたまいし花かごの
千両の朱緑にうかんで

元旦や 無沙汰せし友がらに
ペン走らせる年賀状

ピンクなる 愛をかなでるオルゴール
贈りたまいて記念の曲を

入選

あちこちの 孫のはるけき成人式

「ふれあい」第六号「夏季号（七月十五日発行）」から

ねつかれず 祈りの言葉くり返し
短歌つづればあかつき近し

入選

知らぬまに ショール掛ける看護婦さん
やさしさ嬉し花冷えの朝

五分咲きの 花との便り末尾には
花冷え強し開花おくと

花も散り 気温日毎に高まりて
初夏の代表藤の花

送りたる 短歌の意味を察しくれ
その選評に涙あふれて

待ちかねた ひ孫の便り届きたり
喜び一杯風薫る朝

北国に 花の前線上陸し
春夏合併風薫ると

送りたる 短歌の感想知らせ来し
その文面に涙あふるる

朝窓辺 つつく雀の囀りは
見舞いの代表ことに嬉しき

待かねた 元の部屋に帰れる日
明日にひかえて嬉しさいっぱい

入選

全国に 祝賀気分の満ち満ちて
草木も祝う歡びの日よ

平成六年

「ふれあい」第九号「春季号（四月十五日発行）」から

入選

引き続き 雪のマークが居すわりて
みちのく孫は入試前とか

佳作

椅子並べ リハビリ受ける友がらは
今日は歩行機もつ うらやまし

テレビ映る 梅が枝強くさわやかに
美しく咲く朝ぼらけなり

雪続き 久方振りの大積盛り
列車は止まり人も動けず

北国は 雪がみぞれに移りゆき
都は柳早くも芽吹くと

朝夕に 孫の合格祈りたり
願い通じし鼓動抱きしめ

北国は 雪やつららが南菜の花
全土の長さひしひし感ず

送りたる 短歌まとめし返し文
この母好きとうれし老いゆく

次々と 曾孫心音聞かされて
安産祈るにぎやかな春

雪は解け 三寒四温移りゆき
南は菜種盛りとなる

残雪も いつしか消えて梅が咲き
やがて桜も春はそこまで

五月

七日

母の日に みちのくよりのプレゼント
うれしき心勝る人なし

「ふれあい」第十号「夏季号」(七月十五日発行)から

入選

母の日の 東国からのプレゼント
曾孫に勝る贈物なし

佳作

遅ればせ 気温は上がり春となる
意気盛んなり甲子園児ら

暦では 寒明けの日も過ぎたるに
桜二分咲き春まだ隣り

寒明けの 日も過ぎたるに桜前線
ひと休み雪戻る北

この春は 画面の桜も香り無し
満開となるいつ頃なるや

初曾孫 五ヶ月振りに連れてくる
あやせば笑う笑顔満点

我病みて 幾年過ぎぬ海越えて
娘の看取りその手に涙

長いこと 乗り換え重ね病む母を
見取りに優し娘の愛に泣く

「ふれあい」第十一号「秋季号（十月十五日発行）」から

特選

みちのくの 未っ子よりの定期便
肩書増えし向日葵の花

佳作

甲子園 接戦終り監督の
汗と涙のインタビュー見る

佳作

先生に 良く叱られた見舞いくれし
教え子の声次々弾む

佳作

その昔 姉妹二人で山登り
栗ひろいたり父の畑で

看取りとて 乗り換え重ぬ幾度か
優しき娘その愛に泣く

初曾孫 ボール投げては繰り返す
彼方の庭に紫陽花咲けり

次々と 曾孫心音聞かさるる
安産祈る年暮るるまで

誕生日 米寿の宴をはつてくれ
日の本一の喜び極む

故郷の 名所の一つ大浜を
夫婦で散歩あの日懐かし

初曾孫 成長早し写真見て
立ちて歩けるその日が待たる

目覚めれば 団扇持つ手が汗ばめり
夢で安産夏至夜明け前

我が孫の 好きな先生試験前
合格案じ付き添いくれる

甲子園 勝利を語る監督の
満面流る感激の汗

目覚めても 夜の帳は開けやらず
やがて美し東雲の空

ようやくに 立秋も過ぎ女郎花
桔梗に始まる秋の七草

平成七年

「ふれあい」第十二号「新年号（一月十五日発行）から

入選

暦では 立秋とうに過ぎたれど
団扇はなせぬ蒸し暑き夜半

佳作

二人して 車椅子を押しくれて
院庭回る蔓珠沙華の咲く

久し振り 息子夫婦が見舞いくれ
一目見るなり涙あふれて

目覚めても 夜の帳は明けやらず
光一筋東の空に

略歴

明治 四十年 七月十四日
兵庫県津名郡洲本町で
北川家の三男四女の四女として生れる。
大正 九年 三月
洲本町立洲本第二尋常小学校卒業。
大正 十一年 三月
洲本町立洲本第二尋常高等小学校卒業。
昭和 二年 三月
明石女子師範学校卒業後、教壇に立つ。
昭和 九年 二月
阿部三郎と結婚（二男二女を授かる）。
昭和 十九年
退職、戦後自宅で学習塾。
昭和五十四年 九月四日 夫、永眠。
（享年七十三才：香道院善阿朗順居士）
昭和六十二年十一月
闘病・療養生活に入る。
平成 九年 一月十日 永眠。
（享年九十一才：香徳院善教貫道大姉）